

元総社蒼海遺跡群 (117) 元総社蒼海遺跡群 (118)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 6. 11

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群 (117) 元総社蒼海遺跡群 (118)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



上野国分寺鬼瓦の拓影と蒼海 (118) H-1-9 瓦当紋様の想定図

2 0 1 6. 11

前橋市教育委員会

【詳細解説】

- 上段図（S = 1/8）：拓影・元能社舊海道跡群H-1-9
範囲・元能社舊海道跡群H-1-9瓦当紋様想定図
- 下段左（S = 1/8）：拓影・上野国分僧寺鬼丸A 烟（拓影合成図）
範囲・元能社舊海道跡群H-1-9オーバーラップイメージ
- 下段右（S = 1/8）：拓影・上野国分僧寺鬼丸B 烟（拓影合成図）
範囲・元能社舊海道跡群H-1-9オーバーラップイメージ



蒼海（117）W-2全景（北東から）



調査地点から前橋台地を望む（北西から）

※（番号）は元能社蒼海道跡群。



蒼海（118）H-1-9 カマド構築材に転用された鬼瓦

はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、縄文時代をはじめ様々な遺跡が市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた肥橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（117）・（118）は、上野国府推定区域や上野国分僧寺・国分尼寺などの施設を擁する古代上野国の中核地域であり、多くの注目が集まっています。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出・確認はかないませんでしたが、古代から平安にかけての堅穴住居跡、溝跡などが見つかりました。今回の調査成果をはじめとしてこれまでの調査成果の蓄積は、国府や国府のまちの姿を再現するための資料と考えております。残念ながら、現状のままでの保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、猛暑の中での調査について、発掘調査担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成28年11月

前橋市教育委員会
教育長 佐藤博之

例　　言

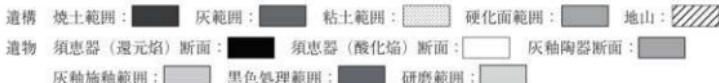
1 本報告書は前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（117）（118）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（117）（118）
調査場所	（117）：前橋市元総社町 1777、1775-2、1776-1、1776-2、1776-3 （118）：前橋市元総社町 1789-3、1789-4
遺跡コード	（117）：27 A 220　（118）：27 A 221
発掘・整理担当者	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 28 年 1 月 7 日～平成 28 年 7 月 22 日
整理・報告書作成期間	平成 28 年 7 月 25 日～平成 28 年 11 月 30 日
3 本書の原稿執筆は I を小峰 篤（前橋市教育委員会）、他を中村が担当した。	
4 出土した人骨については樋崎修一郎氏に鑑定して頂き、玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。 出土した鬼瓦については高井佳弘氏に所見を頂いた。記して感謝の意を表します。	
5 発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。	
	大川明子 新井實 飯島冬子 市場初男 岩田覚 上沢公一 槙原義久 遠藤好則 太田英明 大竹哲夫 加藤知恵子 神坂慶三 鶴田榮作 会田義之 北爪二郎 小島京子 今野妙子 佐藤和彦 佐藤文江 佐復進 郡木英之 高橋一巳 田島君代 多田ひさ子 土屋和美 中野光雄 畠山勝利 棚口久雄 福島裕子 星野博 松島祐樹 松本徳雄 丸山文江 森田恵子 矢内朝夫 吉澤克夫
6 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。	
7 下記の諸氏および機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。 古平武夫 浅間陽 小此木真理 坂口一 高橋清文 永井智教 野村満 日沖剛史 南田法正 山下敬信 山下工業株式会社	

凡　　例

- 1 掘図中に使用した北は座標北である。
- 2 掘図に国土地理院発行 1/200,000 「宇都宮」「長野」、1/25,000 「前橋」、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
- 3 遺構名称は、住居跡：H、竪穴状遺構：T、溝跡：W、井戸：I、土坑墓：D B、土坑：D、ピット：P、落ち込み：O、性格不明遺構：Xである。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。
- 遺構 住居跡・竪穴状遺構・溝跡・井戸・土坑・ピット・その他・・・1/60 全体図・・・1/150
　　遺物 土器・石製品・・・1/3、1/4、1/6 金属製品・・・1/2
- 5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。単位は cm を表す。
- 6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。



7 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-A (浅間 A テフラ : 1783) 、 As-B (浅間 B テフラ : 1108) 、 Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ : 6世紀中葉) 、 Hr-FA (榛名二ッ岳渋川テフラ : 6世紀初頭) 、 As-C (浅間 C テフラ : 3世紀後半~4世紀中葉)

目 次

巻頭図版1・2

はじめに

例言・凡例・目次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と環境	1
III	調査の方針と経過	
1	調査範囲と基本方針	7
2	調査経過	7
IV	基本層序	9
V	遺構と遺物	
1	元総社蒼海遺跡群 (117)	
(1)	堅穴住居跡	9
(2)	堅穴状遺構	10
(3)	溝跡	11
(4)	島跡	11
(5)	土坑、ビット	12
(6)	埋没谷	12
(7)	遺構外出土遺物	12
2	元総社蒼海遺跡群 (118)	
(1)	堅穴住居跡	18
(2)	堅穴状遺構	19
(3)	溝跡	20
(4)	探掘坑	20
(5)	井戸、土坑、ビット	20
(6)	土坑墓	21
(7)	性格不明遺構	21
(8)	遺構外出土遺物	21
VI	元総社蒼海遺跡群 (118) 出土古代人骨	31
VII	発掘調査の成果と課題	32

挿図目次

Fig. 1	遺跡の位置	1	Fig.16	蒼海 (118) W - 2 号溝跡、1号探掘坑、I - 1 号井戸	25
Fig. 2	周辺遺跡図	3	Fig.17	蒼海 (118) I - 2・3 号井戸、DB - 1 号土坑墓	
Fig. 3	周辺測量点とグリッド設定図	6	D - 1 ~ 10 号土坑、P - 2 号ビット	26	
Fig. 4	蒼海 (117) (118) 全体図	8	Fig.18	蒼海 (118) D - 11・12号土坑、P - 1・3 ~ 8 号ビット、X - 1 号性格不明遺構	27
Fig. 5	蒼海 (117) (118) 基本層序	9	Fig.19	O - 1 号落ち込み	28
Fig. 6	蒼海 (117) H - 1 号住居跡①	13	Fig.20	蒼海 (118) H - 1 号住居跡出土遺物	
Fig. 7	蒼海 (117) H - 1 号住居跡②	14	Fig.21	蒼海 (118) H - 2 号住居跡、T - 1 号堅穴状遺構、I - 2 号井戸、DB - 1 号土坑墓、D - 5 号土坑、X - 1 号性格不明遺構、遺構外出土遺物	29
Fig. 8	蒼海 (117) H - 2・3 号住居跡、T - 1・2 号堅穴状遺構、W - 1 号溝跡、1号品跡	15	Fig.22	DB - 1 人骨出土状態 (南から)	31
Fig. 9	蒼海 (117) W - 2・3 号溝跡、1号谷	16	Fig.23	DB - 1 人骨上顎歯咬合面観	32
Fig.10	蒼海 (117) 土坑、ビット	17	Fig.24	蒼海 (117) H - 1 号住居跡カマドの遺物出土状況と使用・廃棄痕跡	33
Fig.11	蒼海 (117) H - 1 号住居跡出土遺物	17	Fig.25	上野国分二寺・王室庵寺・周辺遺跡出土の型押し瓦と本報告資料の瓦当紋様比較	35
Fig.12	蒼海 (117) H - 1 号住居跡、W - 2 号溝跡、D - 4 号土坑出土遺物	18	Fig.26	推定上野国府城の平安時代土坑墓	36
Fig.13	蒼海 (118) H - 1 号住居跡	22			
Fig.14	蒼海 (118) H - 2・3 号住居跡	23			
Fig.15	蒼海 (118) T - 1・2 号堅穴状遺構、W - 1 号溝跡	24			

表目次

Tab.1	周辺道路一覧表	4	Tab.5	元経社養海道路群 (118) 井戸、土坑、ピット計測表	30
Tab.2	隣接調査地点の基本層序	9	Tab.6	元経社養海道路群 (118) 出土遺物観察表	30
Tab.3	元経社養海道路群 (117) 土坑、ピット計測表	12	Tab.7	元経社養海道路群 (118) DB-1 出土人骨歯冠計測値 及び比較表	31
Tab.4	元経社養海道路群 (117) 出土遺物観察表	12			

写真図版目次

- PL.1 養海 (117) 調査区全景 (南から) 養海 (117) H-1 全景 (西から) 養海 (117) H-1 カマド・窓破穴全景 (西から) 養海 (117) H-1 カマド燃焼室遺物出土状況 (西から) 養海 (117) H-1 窓破穴遺物出土状況 (西から) 養海 (117) H-1 カマドSPB土層断面 (西から)
- PL.2 養海 (117) H-2 全景 (東から) 養海 (117) H-3 全景 (南西から) 養海 (117) W-1,D-2 全景 (東から) 養海 (117) W-2,3,1 号谷全景 (南西から) 養海 (117) W-2,3,1 号谷SPA土層断面 (東から) 養海 (117) D-1 全景 (西から) 養海 (117) D-3 全景 (東から) 養海 (117) D-4 全景 (東から)
- PL.3 養海 (118) 調査区全景 (北東から) 養海 (118) H-1 全景 (北から) 養海 (118) H-1~9 瓦瓦出土状況 (北西から) 養海 (118) H-2 全景 (南西から) 養海 (118) H-2 カマド遺物出土状況 (南西から)
- PL.4 養海 (118) H-3 全景 (南西から) 養海 (118) T-1 全景 (北から) 養海 (118) T-2 全景 (北東から) 養海 (118) W-1 全景 (北から) 養海 (118) W-2 全景 (北西から) 養海 (118) 1号保険坑全景 (西から) 養海 (118) I-1 全景 (北から) 養海 (118) I-2 全景 (東から)
- PL.5 養海 (118) I-3 全景 (東から) 養海 (118) DB-1 窓破穴周辺の遺物出土状況 (東から) 養海 (118) DB-1 人骨出土状況 (南から) 養海 (118) X-1 SPA1~X-10 SPA10 土層断面 (東から) 養海 (118) X-1 全景 (南から) 養海 (118) X-1 SPA20~X-30 SPA30 土層断面 (東から) 調査風景 (南東から)
- PL.6 遺物写真 (元経社養海道路群 (117) H-1, W-2, D-4 元経社養海道路群 (118) H-1)
- PL.7 遺物写真 (元経社養海道路群 (118) H-1, 2, T-1, 1-2, D-5, DB-1, X-1, 道構外)

引用・参考文献

- 秋本太郎 2008 「戦国時代の遺物」『滋北北条の城-台砦と支配-』博物館関文化財の複合的活用事業実行委員会
阿部澤智也 2016 「野国寺を探して~前橋市元経社における発掘調査成果を中心として~」『発掘された古代の役所~最新の発掘調査からみた上野・北武州の都令社会~』伊勢崎市教育委員会
浅井牛作 1971 「日本古代史を収め歴史」法政大学出版局
今川信紀 2015 「古代の家族と女性」『岩波国史』第4巻 大代4 岩波書店
尾高善蔵 2006 「第8章 古代の伝統陶器と女性」『岩波国史』第8章 古代の器物 10世紀~13世紀の跡跡 伝統陶器・縄織陶器・山茶碗』岩田市教育委員会
加地二郎 1996 「磐梯郡における古く・平安時代の墓制について」『東京における古く・平安時代の墓制・墓制をめぐる諸問題~』第5回東日本埋蔵文化財研究会 桐木原考古学会・所木立義博著・東日本埋蔵文化財研究会
かみつりの博物館 2013 「『上野国分寺』瓦にこまれた祈り~往古コラボレーションを中心とした古代J-C』第22回特別展
群馬県教育委員会 1988 「『野国寺』上野国分寺」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 1996 「上野国分寺・尼寺・守門跡地」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 1996 「鳥羽遺跡 1・2・K区」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 1990 「上野国分寺・尼寺・守門跡地」(4)」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 1990 「上野国分寺・尼寺・守門跡地」(8)」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 1990 「出土した古代の土器 展示レポート」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 2009 「(社)出土した古代の土器 上野牛込遺跡・元経社牛込遺跡・元経社小内V遺跡」
小林復記 2008 「京から出土する土器の編成と研究」『日本法令の土器様式の成立と展開』7~19世紀~京都編集工房
近藤義典 「大御所の本筋」 菅原都尉小学校 (西版年譜)
坂口一三 2006 「三箇堂寺(奈良真・奈良北)・住居跡・其界隈における土器式別形列の検討~『馬場島史研究』24 馬場島史編さん委員会
早川裕 1990 「第一回 第五回 奈良盆地北端川越地区「群馬史」通史編 1 始原古代」 菅原都
早川裕 2000 「53年開拓野北西側一帯・山麓を流れる河川流域に見られる地形変化 (1) 火山活動の影響を受けた利根川扇状地の地形」『関東・伊豆小笠原』日本の地形4 東京大学出版会
高橋弘洋 1988 「第8回 まとめ 第8回 瓦からみた上野ノ寺」『変遷 上野国分寺』群馬県教育委員会
田中和司 2004 「開拓に因る地盤変動」『上野地区の基礎地盤XVIII 中央土器研究会の今後の課題~土器研究年と中世史研究~』 日本中世土壤研究会
菅原志士郎 2007 「中世の土器と土器の土器」(No. 1~2~3)
郡山十九一 1947 「『野国寺』遺跡・江戸初期水利技術の一例」群馬県考古文化研究所
外山政子・有山耕介・木村真理・三浦洋子・岡正定 2004 「佐世時代から古墳時代へ~平底罐ナベと台付鉢ナバの使用頻度比較~」『研究紀要』3D 群馬県埋蔵文化財調査委員会
金沢文化財研究所 2004 「古代の官道遺跡」
岡正定・外山政子・有山耕介 2005 「土器の使用前跡(スヌ・コロ) 繰替と調理方法復原へのアプローチ」『研究紀要』28 群馬県埋蔵文化財調査委員会
群馬県教育委員会 2011 「元経社養海道路群 (32) 元経社養海道路群 (33)」
群馬県教育委員会 2012 「江戸時代平成22年半渡調査報告」別紙一~統整理から~」
群馬県教育委員会 2013 「元経社養海道路群 (39)」
群馬県教育委員会 2016 「元経社養海道路群 (100)・(101)」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 2004 「元経社小内V遺跡」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 2003 「元経社小見丘遺跡・元経社草作V遺跡」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 2006 「元経社小内V遺跡・社殿跡・守門跡」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 2006 「元経社養海道路群 (2)」
群馬県埋蔵文化財調査委員会 2008 「元経社養海道路群 (13)」
前橋市埋蔵文化財調査実績 2009 「元経社養海道路群 (20)」
前橋市埋蔵文化財調査実績 2010a 「(野起社)養海道路群 (3)」
前橋市埋蔵文化財調査実績 2010b 「元経社養海道路群 (28)」
松井忠松・新井良太 1971 「第一編 第三章 自然の構造」『前橋市史』第一巻 前橋市
森義 1990 「平安時代以降の上野牛込・鎌内および葛之郷の地域を中心とした~」『東国上野研究』第3号 国家上野研究会
渡邉一郎 2000 「火薬の用名でくる町村」『群馬県』26 群馬県地域文化研究協議会
W.Farrer, Population, Disease, and Land in Early Japan, 645-900, Cambridge, Harvard University Press, 1985.

* 主要な文献以外は削除した。

I 調査に至る経緯

平成 27 年 12 月 10 日付けて前橋市長・山本 龍（区画整理課）より元総社蒼海地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に発掘調査及び整理作業を実施中であり、市教委直営による発掘調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。平成 28 年 1 月 7 日付けて前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手し、現地での発掘調査は平成 28 年 7 月 22 日に終了した。その後、発掘調査報告書刊行に向けた整理作業に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（117・118）」（遺跡コード：27A220、27A221）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、（117・118）は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。



Fig. 1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 (Fig. 1・2) 元総社町は、前橋市の南西部に位置し、元総社蒼海遺跡群は、その北西城を占める。利根川を越えて約 3km 東には群馬県庁をのぞみ、南約 2km には本市の玄関口である前橋インターチェンジが所在する。遺跡地は 1960 年代まで主に畑地だったが、前橋市街地から広がる開発の波は元総社町にもおよび、蒼海遺跡群の東部と南部は宅地化が進んできた。さらに近年では、前橋一安中一富岡を結ぶ西毛広域幹線道路を中心とする、元総社蒼海地区画整理事業の進展によって、市街地はさらに拡大しつつあり、遺跡地の周辺は今日、新旧の景観が混濁した過渡的な様相の中にいる。

遺跡地は、榛名山南東麓に伸びる相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にあり、牛池川と染谷川の合流点で画された、南北に長い台地上に立地する。約 2 万年前、浅間山は山体崩落を起こし、前橋泥流が生じた。十数メートルも堆積した泥流層は前橋台地の母体となり、その表層には川が流れた。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の總社や元総社の辺りを流れていると考えられている（早田 1990）。約 1.7 万年前、榛名山の山体崩落によって陣場岩屑などが発生し、その堆積物が相馬ヶ原扇状地の母体となった。約 1.4 ~ 1.3 万年前を前後する頃には前橋泥炭層が形成され、遺跡地の周辺は針葉樹林や草本類が繁茂する環境下にあったと考えられている（早田 2000）。相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの中小河川は榛名山の裾野を南東へ流れるが、元利根川が残した低地の影響を受け、ちょうど遺跡地の辺りで流れを大きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層が堆積した結果、遺跡地の周辺には約 2.5 m の深さにも及ぶ總社砂層が形成されたと考えられている（日沖 2016）。總社砂層の堆積と中小河川の開析作用の反復は、わずかな高台と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ちていて、今日に至るまで下刻を続けている。台地の上部には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度重なる火山災害や人為的な

地形変化の累積を経て、台地表層は次第に平坦化してきたと推測できる。

歴史的環境 (Fig. 2・3, Tab. 1) 紙数の都合上、国府周辺地域を見据えた広域的な叙述は既存の報告書にたのみ、ここでは、本遺跡の様相に合わせて地域を限定し、記載する。

総社砂層より上層で確認される最も古い遺構は現在のところ、縄文時代前期に遡る。遺構の覆土には黒ボク土が混ざることから、台地上に黒ボク土が形成されたのは、この頃と考えられる。該期の住居跡は、蒼海遺跡群（3・4・13・40・41※以下「蒼海」）・小見V～VII遺跡などで確認され、現状では、染谷川左岸の自然堤防に沿って帶状に分布する。続く中期の住居跡は、蒼海（3・40）・小見内VII遺跡などに確認される。蒼海（10）を除くこの一帯は、染谷川自然堤防の北端と、榛名山南東裾の最末端にあたり、緩やかな南斜面で、広い微高地を面的に確保できる地帯である。後期～晩期の遺構は少ないが蒼海（10・101）に確認され、遺物は蒼海（100）・小見V遺跡などにも確認される。中期からの微高地上に加え、台地内の谷地に立地する蒼海（101）にも、この時期の遺構が分布する。小見V遺跡は染谷川、蒼海（10・100）は牛池川の低地に立地し、蒼海（101）に隣接する本遺跡では、わずかながら中期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は少ないが、前期末～後期の遺物は、蒼海（37・39・61）・小見内III遺跡などで出土しており、現状の分布は台地の北端をなす牛池川右岸の一帯に集中する。牛池川の低地平野を北に望む立地だが、低地内の元総社北川遺跡や元総社牛池川遺跡では、遺物は出土するものの、水田跡などの生産域は確認されていない。

古墳時代前期の遺構は、ひとつには蒼海（38・39・17街区）・小見内III遺跡のように、弥生時代後期の分布を踏襲する。また、蒼海（40・48）・小見V遺跡など染谷川の自然堤防上と、蒼海（38・56・61）など牛池川左岸の一帯にも住居跡が分布する。牛池川左岸の一帯では集落域のほか、低地平野に立地する閑泉明神北IV・V遺跡で水田跡が確認され、蒼海（62・81・100）などには周溝墓と推定される溝跡が確認されており、該期における集落域・生産域・墓域を含む、一体的な生活の単位が確認されつつある。中期になると、牛池川の一帯では左岸を中心に遺跡が分布し、蒼海（35・81・91）・甲種荷造西II遺跡・元総社中学校遺跡などで、多くの住居跡が確認される。元総社北川遺跡・閑泉明神北IV・V遺跡など、低地内の遺跡ではHr-FA洪水層に覆われた小区画水田跡が確認されており、この頃までには、牛池川低地平野の広い範囲が生産域として開拓されていたと推測できる。後期になると遺跡は爆発的に増え、周辺遺跡のはば全域で住居跡が確認される。しかしながら該期の古墳は確認されておらず、蒼海（10・23・28）などで埴輪片が出土した程度である。やや離れて約1km東に稲荷山古墳〔43〕が位置し、直径約30m程度の円墳で、6世紀後半頃の築造と考えられている。7世紀になると、約2km北に、総社古墳群を代表する愛宕山古墳〔ロ〕・宝塔山古墳〔ハ〕・蛇穴山古墳〔ニ〕の大型方墳や山王庵寺〔ホ〕が建立されて、政治的中枢を形成する。本遺跡の周辺では、蒼海（9・10・35）で、建物の方向が一定の規則性を示す、大規模な掘立柱建物跡群が確認されている。7世紀の住居跡は、周辺に広く分布するが、前段階に比べると減少し、現状では数軒単位の小規模な群構成が点在するよう見える。本遺跡では、該期の住居跡を調査した。

奈良時代、本遺跡の周辺は推定上野国府域にあたり、国府の位置にはA～Dの4案が推定されている。その内、宮鍋神社南面の国府C案推定地やその周辺では、蒼海（99）・上野国府等範囲内容確認調査28・33・34トレンチで掘込地業をもつ建物跡が確認され、蒼海（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。一方、この城内では8世紀後半から9世紀末葉まで、現状で住居跡は確認されていない。国府域の特徴は周辺遺跡の出土遺物にも反映され、内面に放射状紋を施す土器飾暗文坏や、須恵器盤・高盤の出土率は他の地域に比べて高く、蒼海（22・40・41）・小見VI遺跡など30地点以上に出土例があり、蒼海（13・41）では三彩陶器、蒼海（1・38・40）では腰帶具、蒼海（26・60）では円面鏡なども該期の遺構から出土している。本遺跡では、該期の大規模な溝跡を調査したほか、上野国分僧寺と類似の鬼面紋様をもつ鬼瓦が出土した。

平安時代になると、前代にも増して各遺跡に中小規模の住居跡が数多く確認される。国府や曹司によって構成

される国衙、国司館や市・津、それらの機能を支えた廻丁が一時滞留する宿所的集落など、上野国府域の空間構成の検討は、歴史地理学的な手法によるところが大きかったが、近年では発掘調査の進展によって、域内における地点ごとの考古学的な差異が、おぼろげながら把握されつつある。例えば、国府域の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41）、小見II遺跡などには、住居跡が高い密度で分布する。この地点は、腰帶具・円面鏡の出土率が高く、鉄鉢形土器・三足盤・金の付着した灰釉陶器などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書き器が出土している。また、国府域の西端にあたる染谷川左岸の自然堤防上は、綠釉陶器の出土が多い国府域の中でも、特に高い出土率を示す一帯で、蒼海（8・13）では合計49点もの破片が出土している。なお、国府域の北東端にあたる牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでも、特に多くの住居跡が確認され、馬具・小札・刀装具・鉄鎌など武器・武具の出土が目立つ。国府に関連すると考えられる区画溝は、蒼海（2・7・9・13・36・58）、閑泉橋遺跡などで確認されている。本遺跡では、該期の住居跡や土坑墓を調査した。平安時代中期、国府域は平将門の乱の舞台となった。将門は天慶2年（939年）に国衙を攻略するが、これに関わる考古資料は、現在のところ確認されていない。

国府域の空間構成復元を困難としている要因の一つとして、蒼海城〔i〕の大規模な地形改変がある。国府推定地内に位置する、蒼海（23・29・65）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸に展開する無数の柱穴群が確認され、その帰属時期は15世紀を中心とする。蒼海城に関連する遺物としては、蒼海（23・25）で、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋、袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。室町時代、関東管領を世襲する上野國守護の上杉氏より、守護代に任命された總社長尾氏は、往時に「總社城」と呼ばれたこの城を本拠とした。

慶長6年（1601年）、秋元長朝が總社領主になると蒼海城は廃城となり、總社城〔ii〕が築城された。長朝は戦乱で荒廃した總社領を復興するために灌漑体系の整備を行い、天狗岩用水〔a〕を開削した。天狗岩用水を基幹とする水路網の整備によって領内の新田開発は進み、6,000石程度だった石高は、開削が成った慶長9年（1604年）頃、10,000石に達したと言われる。天狗岩用水の水路網は、五千石堰用水〔b〕や小笠原堰用水〔c〕によって補われるが、これらの用水路は一方で、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛王頭川や八幡川の中小河川から取水し、現利根川から取水する天狗岩用水とは、異なる灌漑体系をもつ。その開削の時期は天狗岩用水を巡る可能性が指摘されており、上野國神名帳に残る「小笠原溝口明神」の記載は、小笠原堰用水を示すと考えら

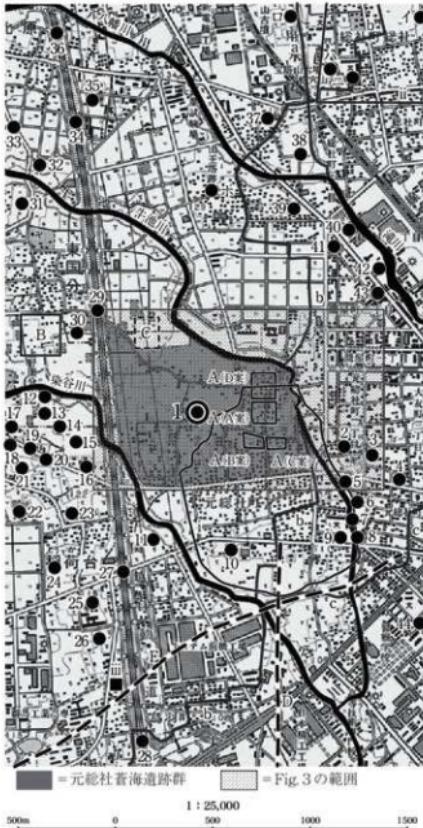


Fig. 2 周辺遺跡図

番号	遺跡名	調査年度	時代・主な発見・出土文物
-	元和寺西海岸跡群 (55)	2013	備良・日引跡
-	元和寺西海岸跡群 (56) (56)	2013	古墳・方形石壠墓・住居跡・壁穴式壠墓・廣島・平安・住居跡 ◇礎文土器（高・中期）・生牛土器（後期）・熱燐車
-	元和寺西海岸跡群 (57)	2014	中世・鐵鏹（青海城） ◇鐵鏹・馬具・青銅（15・16世） ◇（岡山）葉審定藏
-	元和寺西海岸跡群 (58)	2014	平安・大蔵・中世・鐵鏹・織物・唐物鏡・△方錐形・土坑墓 ◇鐵鏹・銀盒・深灰 ◇（岡山）葉審定藏
-	元和寺西海岸跡群 (59)	2014	平安・住居跡・中世・鐵鏹・唐物鏡・△方錐形
-	元和寺西海岸跡群 (60)	2014	古墳・住居跡・高島・大蔵・平安・住居跡・中世・鐵鏹（青海城） ◇磚瓦・灰陶・米至松原形・圓・円筒器・瓦瓶・瓦刀・灰瓦
-	元和寺西海岸跡群 (62)	2014	古墳・圓柱體
-	元和寺西海岸跡群 (63)	2014	古墳・平頭形・日引跡・△熱燐車・菅玉・臼玉
-	元和寺西海岸跡群 (64)	2014	豪傑丸・馬具鉗・平安・住居跡・中世・方錐形壠・土坑墓 ◇鐵鏹・印模 ◇（岡山）葉審定藏
-	元和寺西海岸跡群 (65)	2014	古墳・平頭形・日引跡・中世・鐵鏹（青海城） ◇鐵鏹
-	元和寺西海岸跡群 (66)	2013	古墳・住居跡・中世・鐵鏹・唐物鏡
-	元和寺西海岸跡群 (67)	2013	古墳・住居跡
-	元和寺西海岸跡群 (68)	2013	豪傑丸・住居跡・中世鐵闕（日引跡）
-	元和寺西海岸跡群 (72)	2013	平安・住居跡・大蔵
-	元和寺西海岸跡群 (73)	2015	鐵鏹不明・鉄鏹
-	元和寺西海岸跡群 (81)	2016	鐵鏹・小圓筒形基座・住居跡・鐵鏹・住居跡・廣島・平安・住居跡・壁穴式壠墓 ◇鐵鏹・菅玉・臼玉・右胸飾丸凸
-	元和寺西海岸跡群 (82)	2014	古墳・住居跡
-	元和寺西海岸跡群 (83)	2014	（通稱）鐵鏹
-	元和寺西海岸跡群 (84)	2014	圓筒形
-	元和寺西海岸跡群 (85)	2014	角形～半圓・住居跡・中世・鐵鏹（青海城） ◇轉軸・灰陶・羽口
-	元和寺西海岸跡群 (88)	2014	轉軸不明・高輪
-	元和寺西海岸跡群 (89)	2014	中世・留込鉢
-	元和寺西海岸跡群 (90)	2014	中世・留込鉢
-	元和寺西海岸跡群 (91)	2014	古墳・半圓・日引跡・中世・鐵鏹（青海城） ◇圓形形・盤・金網小包
-	元和寺西海岸跡群 (95)	2014	古墳・鐵鏹・圓錐・平安・足拔器・鐵鏹・目引跡・火燒・△火點・打明良 ◇（岡山）葉審定藏
-	元和寺西海岸跡群 (96)	2014	（通稱）火點
-	元和寺西海岸跡群 (97)	2014	平安・住居跡・中世・鐵鏹・唐物鏡・△方錐形・打明良・高兵
-	元和寺西海岸跡群 (98)	2014	中世・鐵鏹・圓錐 ◇（岡山）葉審定藏
-	上野村西海岸跡群遺跡群 (99) - 上野村西海岸跡群遺跡群 23・34・35・37番	2015	豪傑・平安・鐵鏹・住居跡・豪良・平安・住居跡・丸子形須弥物・道路式須弥・火燒式須弥・△礎文土器（地角）・灰瓦・鐵鏹・鐵鏈
-	元和寺北岸跡群 (100)	2014	古墳・圓錐・鐵鏹・住居跡・豪良・平安・住居跡・丸子形須弥物・道路式須弥・火燒式須弥・△礎文土器（地角）・灰瓦・鐵鏈
-	元和寺北岸跡群 (101)	2014	鐵鏹・日引跡・中世・鐵鏹・鐵鏹・高輪・平安・住居跡・鐵鏈式須弥物・土坑墓・鐵鏹（青海城）・灰瓦・鐵鏈
-	元和寺北岸跡群 (102)	2015	中世・鐵鏹・△火點丸 ◇（岡山）葉審定藏
-	元和寺北岸跡群 (103)	2015	鐵鏹・日引跡・古墳・半圓・圓錐・△礎文土器（中世）・△火點・鐵鏈形・打明良・△荷物行持
-	元和寺北岸跡群 (117)	2016	鐵鏹・日引跡・豪良・平安・火燒
-	元和寺北岸跡群 (118)	2016	平安・日引跡・土坑墓・中世鐵鏹・△火點形 •△火點・阿令舍鬼瓦・火燒
-	元和寺北岸跡群 (120)	2016	平安・日引跡・鐵鏈・圓錐（青海城）・打明良・火燒
-	元和寺北岸跡群 (121)	2016	鐵鏹・日引跡・豪良・平安・火燒・土坑墓 ◇圓錐火燒型
-	元和寺北岸跡群 (125)	2015	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・道路式須弥・中世・土坑墓・火燒鏈 •△火點
-	元和寺北岸跡群 (126) (127)	2015	古墳・日引跡・豪良・半圓・日引跡・道路式須弥・中世・土坑墓・火燒鏈 •△火點
-	元和寺小見遺跡	2000	鐵鏹・古墳・日引跡・豪良・平安・火引跡・丸子形須弥物・道路式須弥 ◇鐵文（小稿）・鐵鏈・灰瓦・鐵鏈
-	元和寺小見遺跡	2002	鐵文・古墳・日引跡・豪良・平安・火引跡・丸子形須弥物・道路式須弥 ◇鐵文（小稿）・鐵鏈・灰瓦・鐵鏈
-	元和寺小見遺跡	2006	鐵文・古墳・日引跡・豪良・平安・火引跡・鐵鏈式須弥物・中世・道路式須弥 ◇鐵文土器（中世）・鐵鏈
-	元和寺小見遺跡	2003	鐵文・古墳・半圓・日引跡・中世・鐵鏈式須弥物・豪良・火燒・打明良・鐵鏈・火點・打明良・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2004	鐵文・古墳・圓錐・日引跡・中世・鐵鏈式須弥物・豪良・火燒・打明良・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2004	鐵文（豪良）・古墳・日引跡・豪良・平安・火引跡・丸子形須弥物・豪良・火燒狀須彌・火燒・豪良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2004	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒狀須彌・豪良・火燒・火燒狀須彌・豪良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2006	豪良・日引跡・豪良・鐵鏈・圓錐・日引跡・豪良・平安・火燒・丸子形須弥物・豪良・火燒狀須彌・火燒・豪良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2008	豪良・日引跡・豪良・平安・鐵鏈・圓錐・打明良・鐵鏈・火點
-	元和寺小見遺跡	2009	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2010	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2010	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2011	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒
-	元和寺小見遺跡	2012	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒
-	元和寺小見遺跡	2012	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒
-	元和寺小見遺跡	2014	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	2004	豪良・日引跡・豪良・平安・火燒・打明良・火燒
-	元和寺小見遺跡	1994	豪良～平頭形・鐵鏈・鐵鏈・圓錐須弥物 (小稿)・高輪・鐵鏈丸・△火點・菅玉 (12c)
-	河内郡草木台遺跡	2001	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・鐵鏈式須彌・中世・鐵鏈・火燒鏈・△火點 (12c)・鐵鏈・菅玉
-	元和寺毛地跡群 1・2・5・6・7・8・9番	2000	鐵文・古墳・圓錐・日引跡・豪良・平安・火燒・丸子形須弥物・道路式須弥・△鐵文土器（中世）・鐵鏈
-	元和寺毛地跡群 18・21・23・24番	2000	鐵文・古墳・圓錐・日引跡・豪良・火燒・丸子形須弥物・豪良・火燒狀須彌・火燒・豪良・火燒
-	元和寺毛地跡群 19・20・21番	2000	豪良・日引跡・豪良・圓錐・日引跡・豪良・平安・火燒・丸子形須弥物・豪良・火燒狀須彌・火燒・豪良・火燒
-	元和寺毛地跡群 20・21番	2000	豪良・日引跡・豪良・圓錐・日引跡・豪良・平安・火燒・丸子形須弥物・豪良・火燒狀須彌・火燒・豪良・火燒
-	上野村西海岸跡群遺跡群 20・21・22番	2000・2012	古墳・日引跡・豪良・半圓・日引跡・鐵鏈式須彌・豪良・火燒・道路式須彌 ◇鐵文土器（地角）・火點・△火點
-	上野村西海岸跡群遺跡群 21・22・23番	2011	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・鐵鏈式須彌・△火點 (12c)・鐵鏈
-	上野村西海岸跡群遺跡群 21・22・23番	2012	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・鐵鏈式須彌・△火點 (12c)・鐵鏈
-	上野村西海岸跡群遺跡群 21・22・23番	2012	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・鐵鏈式須彌・△火點 (12c)・鐵鏈
-	上野村西海岸跡群遺跡群 21・22・23番	2012	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒
-	上野村西海岸跡群 19・20・21・22・23番	1969・1970・1996・2000	豪良・日引跡・豪良・半圓・日引跡・豪良・火燒・圓錐・打明良・火燒
-	越野村伊賀原人古置跡	2001	豪良・半圓・日引跡・鐵鏈式須彌 (豪良)・火燒・打明良・火燒
-	越野半導管人古置土器遺跡	2001	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・△火點・火燒・鐵鏈車・菅玉
-	越野半導管人古置土器遺跡	2002	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・圓錐形・△火點・鐵鏈車・菅玉
-	越野半導管人古置土器遺跡	2003	古墳・圓錐・日引跡・豪良・火燒
-	越野半導管人古置土器遺跡	1999	古墳・石圓錐・圓錐・△鐵文土器（高・中期）・打明良・火燒・打明良
-	越野半導管人古置土器遺跡	2001	古墳・半圓・日引跡・打明良・火燒
-	越野半導管人古置土器遺跡	2002	鐵文・古墳・圓錐・日引跡・打明良・火燒
-	越野半導管人古置土器遺跡	2003・2004	古墳・半圓・日引跡・打明良・火燒・△鐵文土器（高・中期）・打明良・火燒
-	越野半導管人古置土器遺跡	2004	古墳・半圓・日引跡・打明良・火燒
-	越野半導管人古置土器遺跡	1993	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒
-	圓錐形土器遺跡	1995	古墳・日引跡・△圓錐形
-	八幡社川根跡	2002・2004	鐵文 (豪良)・古墳・日引跡・打明良・火燒・△鐵文土器 (打明良)・打明良・火燒
-	元和寺牛糞山遺跡	2002・2004	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・鐵鏈式須彌・△鐵文土器 (打明良)・打明良・火燒
-	元和寺牛糞山遺跡	2016	古墳・日引跡・豪良・平安・火燒・圓錐・△鐵文土器 (打明良)・打明良・火燒

れている（都丸 1943、近藤【出版年不詳】）。また、つい最近暗渠化してしまったが、五千石堰用水の左岸にあたる甲稻荷坂大道西遺跡の A 区では、五千石堰用水と同一方向に流下する、11 世紀以前に埋没した大規模な溝跡が確認されている。



III 調査の方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地であり、調査面積は、蒼海（117）が147 m²、蒼海（118）が186 m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000を基点とする4 mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYとして北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系）
(117) X 127, Y 160	X = 43360.000 m, Y = - 71692.000 m	X = 43714.9089 m, Y = - 71983.7594 m
(118) X 140, Y 165	X = 43340.000 m, Y = - 71640.000 m	X = 43694.9092 m, Y = - 71931.7595 m

発掘調査は、遺構確認面まで重機（0.25 m級バックホウ）を用いて表土を除去した。表土除去はAs-B混入土層の下層までを目安とし、As-C混入黒色土層～黒ボク土層を遺構確認面とした。遺構確認面は、ジョレンを用いて精査し、平面的な土質の観察によって遺構を判断した。遺構の重複が激しく、判断ができない範囲は、調査に先行してサブトレーンチを下層まで掘り、その底面と土層断面の観察によって、遺構を判断した。確認した遺構は、土層を記録するため土層断面を残しつつ覆土を除去した。遺構に伴うと判断した遺物は、出土位置を記録した上で取り上げた。なお、隣接する蒼海（101）の調査所見から、蒼海（117）の南部には古代以前の埋没谷と縄文時代の土坑墓群が想定されたため、遺構調査後、Y166 座標以南を総社砂層上面まで掘り下げ、遺構確認を行ったが、南へ下る緩やかな地形傾斜が確認できたものの、遺構は確認できなかった。

遺構の図面記録は、断面図・平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用い、オルソフォトを用いた写真測量も多用した。写真記録は、土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対し、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（Canon EOS55・EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（Canon EOS50D・SIGMA DC18-200mm）を用い、基本的に絞り値 f 8~11・広角端で撮影を行った。

報告書の作成に際しては、DTPの手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集図に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、手測りでの原図作成後デジタルトレースを行った。遺物写真的撮影にはデジタルカメラ（Canon EOS 5D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれらの調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

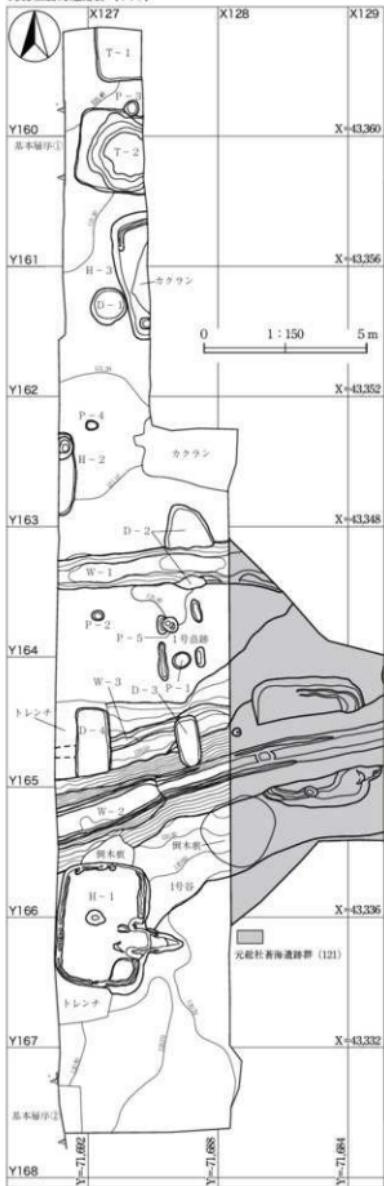
2 調査経過

平成28年1月7日に市教委・区画整理課・技研の三者で事前打ち合わせを行った。発掘調査は住宅移転等を待ち、3月10日から蒼海（118）の表土除去を行った。表土除去とともに遺構確認を進め、15日から遺構調査を始めた。24日、鬼瓦が出土。30日にはほぼ全ての調査を終え、翌31日に調査区の全景写真を撮影した。4月4日に市教委による終了確認が行われ、その後、残務と撤収作業を行い、6日に蒼海（118）の調査を終えた。

住宅移転等による中断期間を挟み、6月21日から、蒼海（117）の表土除去を行った。表土除去とともに遺構確認を進め、翌22日から個々の遺構調査を始めた。30日、平安時代の埋没谷直下に大溝を確認。掘り下げに苦労する。7月15日には調査が終盤を迎える、市教委による終了確認が行われた。21日にラジコンヘリコプターで調査区全景の空中写真撮影を行った。翌22日に撤収作業を行い、蒼海（117）の調査を終えた。

整理作業は、平成28年7月25日から着手した。8月12日に遺物の洗浄と注記を、15日に遺構図面の編集作業を終えた。24日に出土遺物の分類と報告対象の抽出を終え、観察と実測を始めた。9月8日に遺構図面の版下が完成。原稿執筆と組版は12日から行った。16日に遺物図面の版下が完成。21日に出土遺物の写真撮影を終え、10月11日に写真図版の版下が完成した。28日には原稿執筆と組版を終了。市教委による査読の後、11月18日に入稿した。30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

元總社蒼海遺跡群 (117)



元總社蒼海遺跡群 (118)

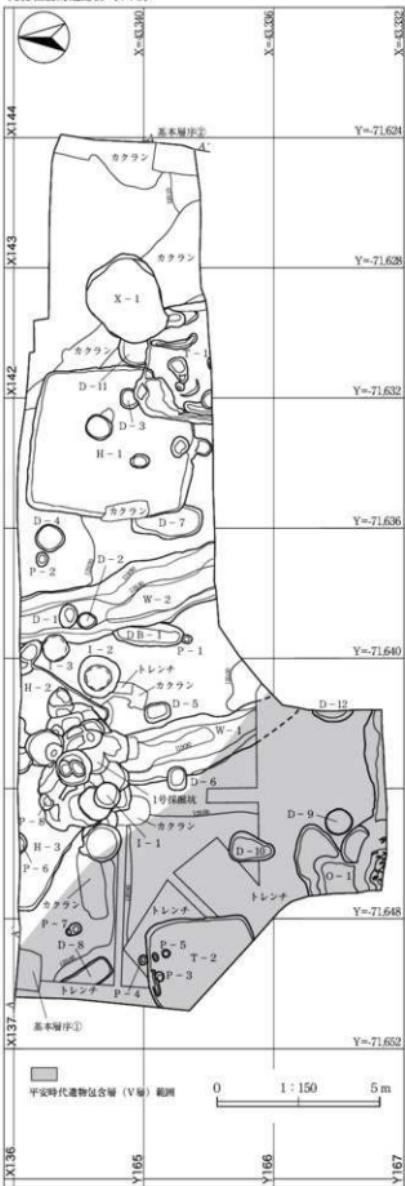


Fig. 4 蒼海 (117) (118) 全体図

IV 基本層序

調査地の現況は、どちらの調査区も宅地と畠地であった。表土直下は As-B 混入土層の堆積が厚いため、現況の構造物や耕作による、遺構への影響は弱い。蒼海 (118) の V 層は 9~11 世紀の遺物包含層で、蒼海 (117) 1 号谷の覆土と同質だが、しまりが強い。(117) IV 層は Hr-FA を含む。(117) V 層 = (118) VI 層は As-C 混入黒色土。(117) VI 層 = (118) VII 層は黒ボク~淡色黒ボク土に相当する。(117) VII 層 = (118) VIII・IX 層は総 Tab. 2 隣接調査地点の基本層序

			小西ガタ E 区		遺物等	
(117)	(118)	(101)	(33) 区	(2) トレー		
I	I + II	I	I	1	1	表土
-	-	-	-	-	-	As-A
II・III	III	III	III	2	2	As-B
-	-	IV + V	-	-	-	As-B, Hr-FA, As-C
(1号谷)	V	-	-	-	-	As-C
VI	-	VI	VI	3	3	Hr-FA, As-C
VII	M	VI	VI	4	4	As-C
VIII	W	VI	VI	5	5	As-C
IX	W-II	-	-	-	-	As-G (アシガタ) - 淡色黒ボク土 淡色黒ボク土・混合層
-	W-V	V	5・6	-	-	As-G (アシガタ) - 黒色土
X	W-III	-	-	V	-	As-G (アシガタ) - 黒色土
XI	W-III	VI	7	VII	-	As-G (アシガタ) - 黒色土

Tab. 2 隣接調査地点の基本層序

社砂層漸移層だが、(118) VII・IX 層は粘質土化しており、(118) 1 号探査坑はこの粘質土の探査を目的としている。以下は総社砂層で、堆積は厚く(118) X-1 壁面では 2.7 m 以上の堆積が確認できた。

それぞれの観察地点における層序の比高差から、調査地点は本来的に、東側の谷地形と南側の埋没谷が影響した、南東へ下る緩傾斜地で、(117) W-2 の開削後は、その埋没過程で一時的に浅く谷地形化したもの、As-B 混入土

元總社蒼海遺跡群 (117)



元總社蒼海遺跡群 (118)

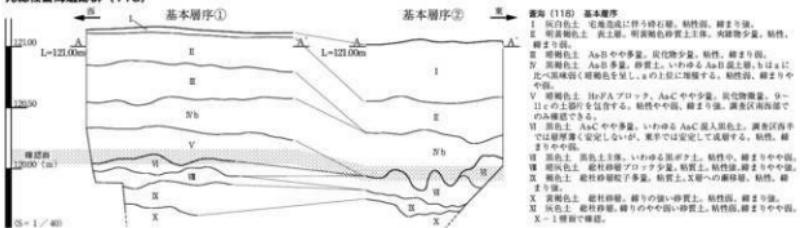


Fig. 5 蒼海 (117) (118) 基本層序

V 遺構と遺物

1 元總社蒼海遺跡群 (117)

(1) 穴住居跡

H-1 号穴住居跡 (Fig. 6・7・11・12, PL. 1・6)

位置 X 126・127, Y 165・166 主軸方向 E - 7° - S 規模 東西軸 3.95 m・南北軸 3.95 m・深さ 0.54 m。面積 8.49 m² 覆土 遺構の直上は 1 号谷に伴う遺物包含層が被覆。覆土は Hr-FA や As-C を含む。床面貼床で、東半部はややしまりの強い硬化面。重複 W-2、1 号谷と重複。新旧関係は(倒木痕→)本遺構→W-2→1 号谷。カマド 東壁のやや南寄で確認。全長 1.72m・燃焼室内幅 0.51m・煙道内幅 0.21m。白色

粘土で構築された燃焼室の袖部が残存。焚口部は内幅0.48mで、右袖には4の長胴甕を逆位に安置し、左袖は浅い据え穴に安山岩の棒状亜円砾を据えて構築材とする。右袖構築材に転用された長胴甕の燃焼室内壁側は二次的な被熱痕が顕著である。支脚は出土しなかった。燃焼室と煙道部の境は有段で、燃焼室よりも一段高い煙道の底面は、緩やかに傾斜しながら煙出し部にかけて立ち上がる。燃焼室の奥半分から煙道手前半分の壁面は良く焼けている。燃焼室の崩落土層中からは底部のみを欠損した1の長胴甕が横位に安置遺棄された状態で出土し、焚口部の床面直上からは2の長胴甕が破損遺棄された状態で出土した。燃焼室の掘り方は、方形に掘り込まれる。

貯蔵穴 堪穴部南東隅で確認。長軸(0.82)m・短軸(0.81)m・深さ0.35m。不整形形でやや浅い掘り込みの底面中央にP1を掘り、そこに3の長胴甕を正位に安置し、肩部まで埋め戻す。埋甕のように安置された長胴甕の器面にはスカヨコゲ状の使用痕、底部外面には支脚の接触痕が観察でき、貯蔵穴に安置される以前は支脚を用いてカマドに懸架されていたと推測できる。掘り方にはP1に重複してP2が確認できる。P1と同規模で、長胴甕の安置以前に埋め戻されており、P1以前の長胴甕の据え穴と判断できる。柱穴 確認できず。壁周溝北壁際は途切れがちだが、ほぼ全周で確認できる。掘り方 堪穴部の北半部と南西部に不整形の掘り込みをもつ。底面はV層。出土遺物 覆土中や床面直上から遺物はあまり出土せず、壁際の床面直上から5の磨石が出土した程度である。対して、カマドと貯蔵穴からは、略完存の長胴甕が4個体出土した。いずれも同一型式と判断できる。口縁部に最大径をもち、胴部の張りは弱い。口縁部は「くの字」状を呈する。肩部外面は斜位のヘラケズリで調整されるがその範囲は狭い。器壁はさほど薄くなく、頭部と胴部下半にやや明瞭な接合帯が観察できる。時期 カマド内と貯蔵穴の出土遺物から、7世紀後半～8世紀前半と推定する。

H-2号住居跡 (Fig. 8, PL. 2)

位置 X 126, Y 162 主軸方向 N - 1° - E 規模 東西軸(0.52)m・南北軸(2.51)m・深さ0.45m。調査区西端において住居跡東端部のみ調査。面積(1.10)m² 覆土 Hr-FAやAs-Cを含む。上～中層は桑根による土壤の搅拌がひどい。床面 直床。硬化面不明瞭。重複 なし。カマド 確認できず。貯蔵穴 北東隅部に床面を掘り込む土坑が確認でき、構築位置から貯蔵穴と判断した。長軸(0.74)m・短軸(0.42)m・深さ0.35m。楕円形で上端は漏斗状に開く。覆土上層から須恵器中型甕の胴部片が出土した。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 なし。底面はV層。出土遺物 ごく少ない。覆土中から模倣坏の細片が1片出土した。貯蔵穴から出土した長胴甕は、外面に自然釉が厚く、内面は同心円凸で具痕が顕著。いずれも細片のため図示には至らず。時期 出土遺物から7～8世紀と推定する。

H-3号住居跡 (Fig. 8, PL. 2)

位置 X 127, Y 160-161 主軸方向 (N - 12° - W) 規模 東西軸(1.31)m・南北軸(3.87)m・深さ0.51m。調査区東端において住居跡西端部のみ調査。面積(3.32)m² 覆土 Hr-FAやAs-Cを含む。床面 直床。北西隅部にしまりのやや強い硬化面。中央部は搅乱により破壊される。重複 なし。カマド・炉 確認できず。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 北西隅部から北壁際で確認できる。掘り方 なし。底面はV層。出土遺物 覆土中から土師器坏・甕、須恵器甕が少量出土したが細片のため詳細不明。時期 覆土にAs-Bを含まないことから中世以前と推定する。

(2) 堪穴状遺構

T-1号堪穴状遺構 (Fig. 8)

位置 X 127, Y 159 主軸方向 (N - 5° - W) 規模 東西軸(1.44)m・南北軸(1.19)m・深さ0.26m。調査区北東端において遺構の南西端部のみ調査。形状 確認部分では方形。覆土 As-Cを含む。上～中層は焼土と炭化物がやや多い。重複 なし。出土遺物 なし。時期 覆土にAs-Bを含まないことから中世以前と推定する。

T-2号堪穴状遺構 (Fig. 8)

位置 X 126・127, Y 159・160 主軸方向 (N - 5° - W) 規模 東西軸 (2.27) m・南北軸 2.54 m・深さ 0.30 m。遺構の東端部は調査区外。形状 確認部分では浅い方形の堅穴部底面に、円形の溝跡が付属する。覆土 As-C を含む。円形溝の覆土には炭化物がやや多い。重複 なし。出土遺物 堅穴部や円形溝の覆土中から土師器・須恵器の坏・甕が少量出土したが細片のため詳細不明。時期 覆土に As-B を含まないことから中世以前と推定する。

(3) 溝跡

W-1号溝跡 (Fig. 8, PL. 2)

位置 X 126 ~ 168, Y 163 主軸方向 E - 4° - N 規模 長さ (5.34) m・上幅 1.33 m・下幅 0.34 m・深さ 0.48 m 形状等 東西に走向する。断面 U 字状。東へわずかに勾配が下る。重複 D - 2 と重複。新旧関係は D - 2 → 本遺構。覆土 As-B を多く含む。出土遺物 土師器・須恵器の坏・甕や繩文土器の細片が少量出土したが、本遺構の埋没時期に伴う遺物はなく、いずれも周囲からの混入と判断した。時期 覆土に As-B を多く含むことから、おおむね 12 世紀以降と推定する。

W-2号溝跡 (Fig. 9・12, PL. 2・6)

位置 X 126 ~ 128, Y 164 ~ 165 主軸方向 E - 16° - N 規模 長さ (6.30) m・上幅 2.94 m・下幅 0.23 ~ 0.61 m・深さ 1.26 m 形状等 北東 - 南西に走向する。断面逆台形状。底面に明確な勾配差は観察できず、西部は底面幅が広い。重複 H - 1, D - 3・4、1号谷と重複。新旧関係は (倒木痕→) H - 1, D - 4 → 本遺構 → D - 3 → 1号谷。また間接的な重複関係から、W - 3 は本遺構と同段階と判断できる。覆土 遺構の直上は 1号谷の覆土が被覆。上層の 6・7 層は総社砂層ブロックを多く含み、埋め戻し土と判断できる。以下 13 層までの土質は粒度が細かい。中層の 14 層は 6・7 層に類似し埋め戻し土と判断できる。しまりがやや強く、平面的にはスポット状の硬化面として観察できた。以下最下層まで、総社砂層ブロックを多く含む黄褐色系の土と、Hr-FA や As-C を含む粒度の粗い暗褐色～黒色系の土が互層に堆積し、やや短期間の埋め戻し土と判断できる。葉理構造や砂層の堆積など流水の痕跡は観察できない。出土遺物 上層から出土した 3 は須恵器高盤の脚部と判断した。1・2 の須恵器蓋と高台付坏は下層から出土したが、出土位置を考えると、重複する H - 1 から流入した資料の可能性がある。1 は平城宮分類「坏 G」に伴う有カエリ蓋。2 の底径は大きく高台は低い。底部外面には回転ヘラケゼリによる最終調整が観察できる。時期 重複関係から 8~9 世紀と推測する。備考 本遺構は、連続的に調査を行った蒼海 (121) W - 4 と同一の溝跡。さらに東には土橋状の掘り残し部を挟み蒼海 (121) W - 5 が続き、合わせた総延長は 23.20 m を測る。また W - 3 は、重複と位置関係から本遺構に付属する小溝と推測できる。

W-3号溝跡 (Fig. 9, PL. 2)

位置 X 126 ~ 128, Y 164 主軸方向 E - 16° - N 規模 長さ (6.41) m・上幅 0.41 m・下幅 0.19 m・深さ 0.18 m 形状等 北東 - 南西に走向する。断面 U 字状。底面に明確な勾配差は観察できない。重複 D - 3・4、1号谷と重複。新旧関係は (倒木痕→) D - 4 → 本遺構 → D - 3 → 1号谷。また間接的な重複関係から、W - 2 は本遺構と同段階と判断できる。覆土 遺構の直上は 1号谷に伴う遺物包含層が被覆。As-C を含み、土質は粒度が粗い。出土遺物 なし。時期 重複関係から 8~9 世紀と推測する。備考 本遺構は、重複と位置関係から W - 2 に付属する小溝と推測できる。

(4) 畠跡

1号畠跡 (Fig. 8)

位置 X 127, Y 163・164 主軸方向 N - 11° - W 規模 2.40 m × 1.49 m の範囲で確認。畠間溝の間隔は 1.10 m、深さ 0.08 m。形状等 南北 2 条の浅い畠間溝。畠間溝の断面は弧状。重複 P - 5 と重複。新旧関係は本遺構 → P - 5。覆土 Hr-FA や As-C を含み、土質は粒度が粗い。出土遺物 なし。時期 覆土に

As-B を含まないことから中世以前と推定する。

(5) 土坑、ピット (Fig.10・12、PL. 2・6)

D - 3・4 は、主軸方向や形状・規模から土坑墓の可能性があるが、土坑内から人骨は出土しなかった。D - 3 の覆土中からは鉄釘の破片が出土したが、細片のため図示には至らなかった。D - 4 の覆土最下層から出土した1の須恵器長頸瓶は肩部が張る形態と推測でき、台部には上野地域の諸窯に特徴的な作り込みが観察できる。なお、各遺構の計測値については、Tab. 3 に示す。

Tab. 3 元経社蒼海遺跡群 (117) 土坑、ピット計測表

遺構名	位置	地質	施設	深さ	平面形状	主な遺物	時期	備考
D - 1	X 127 Y 163	1.27	108	0.20	円形	中世初期 Jōmon	平安時代	As-B を含まない。
D - 2	X 125 Y 162 - 163	2.00	120	0.15	半円形内側	中世初期 Jōmon	平安時代	As-B を含まない。
D - 3	X 127 Y 162	2.10	0.28	664	圓形	律2式 宝鏡 白磁 須恵器 瓦	平安時代	As-B を含まない。 丁度同じもの。
D - 4	X 126 Y 163	2.10	108	0.20	真円形 直面積 横面積 壁	中世初期 Jōmon	平安時代	As-B を含まない。
P - 1	X 127 Y 163	0.96	0.49	0.00	円形	平安時代	平安時代	As-B を含まない。
P - 2	X 125 Y 162	0.37	0.28	0.25	円形	平安時代	平安時代	As-B を含まない。
P - 3	X 125 Y 162	0.40	0.41	0.20	円形	平安時代	平安時代	As-B を含まない。 丁度同じもの。
P - 4	X 127 Y 163	0.30	0.29	0.00	扇形内側	平安時代	平安時代	As-B を含まない。
P - 5	X 125 Y 162	0.30	0.13	0.10	円形	平安時代	平安時代	As-B を含まない。 丁度同じもの。

(6) 埋没谷

1号谷 (Fig. 9, PL. 2)

位置 X 126 ~ 128、Y 163 ~ 167 主軸方向 E - 16° - N 規模 長さ (7.81) m・幅 8.50 ~ 5.23 m・深さ 0.48 m 形状等 北東 - 南西に走向する。断面緩い弧状。重複 H - 1、W - 2・3、D - 3・4 と重複。新旧関係は (倒木痕 →) H - 1、D - 4 → W - 2・3 → D - 3 → 本遺構。覆土 Hr-FA や As-C を含み、土質は粒度が細かい。出土遺物 細片のため図示に至らないが、覆土中に灰釉陶器の碗・壺や須恵器の壺・甕などの細片を含む。10世紀代の土器片をやや多く包含し、重複する住居跡から混入したと推測できる7 ~ 8世紀の土器片を少量包含する。時期 覆土中に含まれる遺物から10世紀と推定する。備考 本遺構は、連続的に調査を行った蒼海 (121) 1号谷と同一の埋没谷。総延長は25.10 mを測る。W - 2の上部に沿って形成されており、一連の大溝の埋没過程に生じた谷地形と判断できる。明確な痕跡としては残存しないものの、蒼海 (118) V層は本遺構に関連する包含層と判断できる。

(7) 遺構外出土遺物

遺構外から際立った遺物の出土はない。遺構に伴わない時期の遺物として、遺構覆土中や遺構確認面から縄文土器が数片出土したが、阿玉台式と判断できる破片以外は細片のため詳細不明であり、図示には至らなかった。

なお、隣接する蒼海 (101) の調査所見から、蒼海 (117) の南部には古代以前の埋没谷と縄文時代の土坑墓群が想定されたため、遺構の調査後、Y166座標以南を総社砂層上面まで掘り下げ、再度遺構の確認を行ったが、南へ下る緩やかな地形傾斜は確認できたものの、遺構の確認には至らなかった。後日、下水道工事に伴いX127・Y169 ~ 167座標に掘り込まれたトレチ状の深掘りを断面観察したところ、現況の東西道路の直下で、As-B 混土層以下の基本層序が大きく落ち込む状況を確認できた。このことから、蒼海 (101) で確認された埋没谷は、蒼海 (117) の南端付近で急峻な崖線を成して立ち上がるるものと推測できる。

Tab. 4 元経社蒼海遺跡群 (117) 出土遺物観察表

H - 1

No	出土位置	種別	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	持続状況・備考
1	No1	土脚部 鉄鋤痕	20.8	(53)	(34)	チャート 白・黒色化	良好	外 内 内	内側：口縁部はカットされ、周縁部がハラカリ。脚部施土はウナギ型。脚部は1.1倍強者。外側：口縁部はコリナ。脚部はハラカリ。施土はハラカリ。内側：口縁部はコリナ。脚部はハラカリ。	完全な、底堅欠損。 サツアド内。
2	No2	土脚部 鉄鋤痕	23.3	(39)	(30)	チャート 白・黒色化	良好	外 内 内 内	内側：口縁部はカット後、周縁部がハラカリ。脚部はハラカリ。外側：脚部はハラカリ。内側：口縁部はコリナ。脚部はハラカリ。施土はハラカリ。	完全な、 底堅欠損。 サツアド内。
3	No3	土脚部 鉄鋤痕	22.6	55	35.6	チャート 白・黒色化	良好	外 内 内 内	内側：口縁部はコリナが、周縁部がハラカリ。脚部はハラカリ。内側：口縁部はコリナ。脚部はハラカリ。施土はハラカリ。	完全な、 底堅欠損。 サツアド内。
4	No5	土脚部 鉄鋤痕	23.1	-	(29.6)	角閃石 白・黒・赤化	良好	外 内 内 内	内側：脚部はコリナが、周縁部がハラカリ。脚部はハラカリ。内側：口縁部はコリナが、周縁部がハラカリ。脚部はハラカリ。施土はハラカリ。	完全な、 底堅欠損。 サツアド内。
No	出土位置	種別	口径	底径	高さ	石材	焼成	色調	形態、成・整形、文様等の特徴	持続状況・備考
5	No4	白基盤 青斑石	18.3	8.2	32	安山岩	-	オリーブ灰化	867.0g 上下面平滑、全面磨削面。	完全な、 底堅欠損。

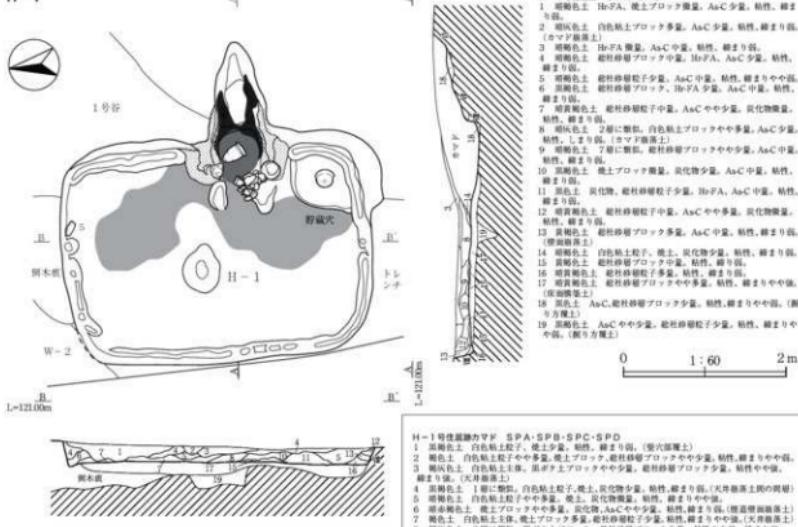
W-2

No.	出土位置	種別、地層	口径	直径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・断面、文様等の特徴	焼成状況・備考
1	壤土 昭和初期 高砂川床	切妻 〔88〕	-	(18)	チャート 白色灰	褐鐵 外: 黄褐色 内: 黄褐色	外: 棒状 内: 棒状	外表面: ロココナラ模様。井干状鉢形輪郭ハケタケリ。ネオヤブリ模様部輪郭 内側: ロココナラ。有エリ。	1号存在。 堆土上層。 高砂川床 T2K27 1号式。	
2	壤土 昭和初期 高砂川床	切妻 〔10〕	-	11.7	(19)	白・淡青色 白色灰	褐鐵 外: 黄褐色 内: 黄褐色	内側: 有青色 外表面: 有青色 内側: 有青色	内側: 有青色 外表面: 有青色 内側: 有青色	2号存在。 堆土上層。
3	No.1 昭和初期 高砂川床	切妻 〔83〕	-	-	(8.3)	白色灰	褐鐵 外: 黄褐色 内: 黄褐色	内側: ロココナラ。ネオヤブリ後身部分合体。輪郭小口に浅い横凹状 内側: 腹部端縁にV字型成形。コロコナ。	3号存在。 堆土上層。	

D-4

No.	出土位置	種別、地層	口径	直径	高さ	地土	焼成	色調	形態、成・断面、文様等の特徴	焼成状況・備考
1	No.1 昭和初期 高砂川床	切妻 〔10〕	-	12.3	(10.2)	白・淡青色 白色灰	褐鐵 外: 黄褐色 内: 黄褐色	内側: ロココナラ。側面下に浅い横凹溝2条。台面部両角部 内側: ロココナラ。	1号存在。 堆土上層。	

H-1

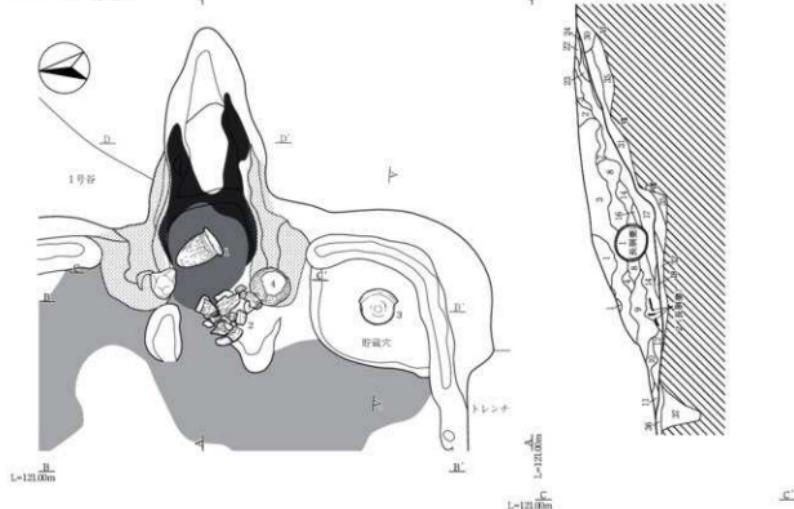


H-1掘り方



Fig. 6 蒼海(117) H-1号住居跡①

H-1カマド・貯藏穴



H-1カマド・貯藏穴掘り方

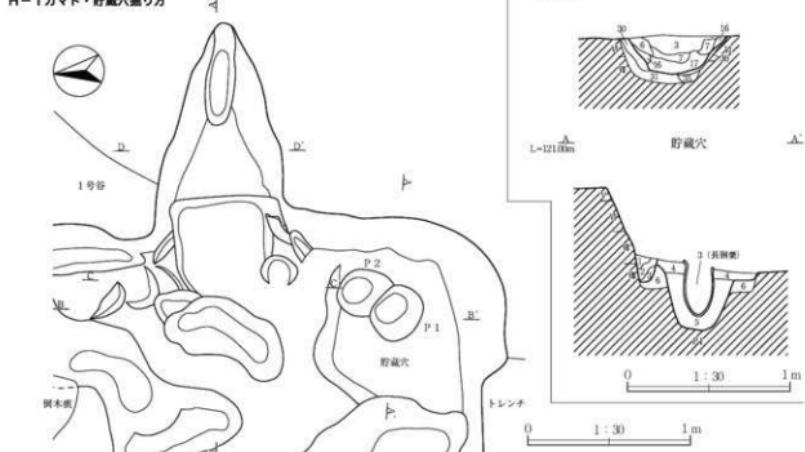


Fig. 7 菅海 (117) H-1号住居跡②

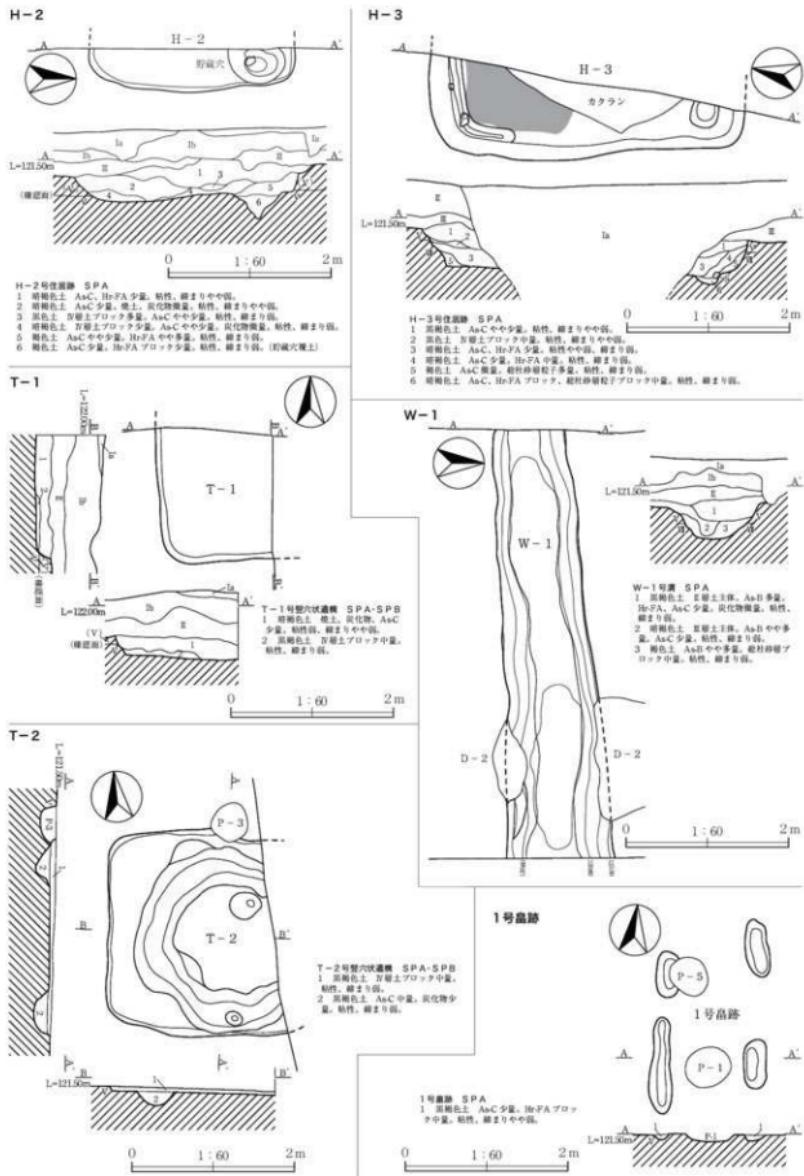
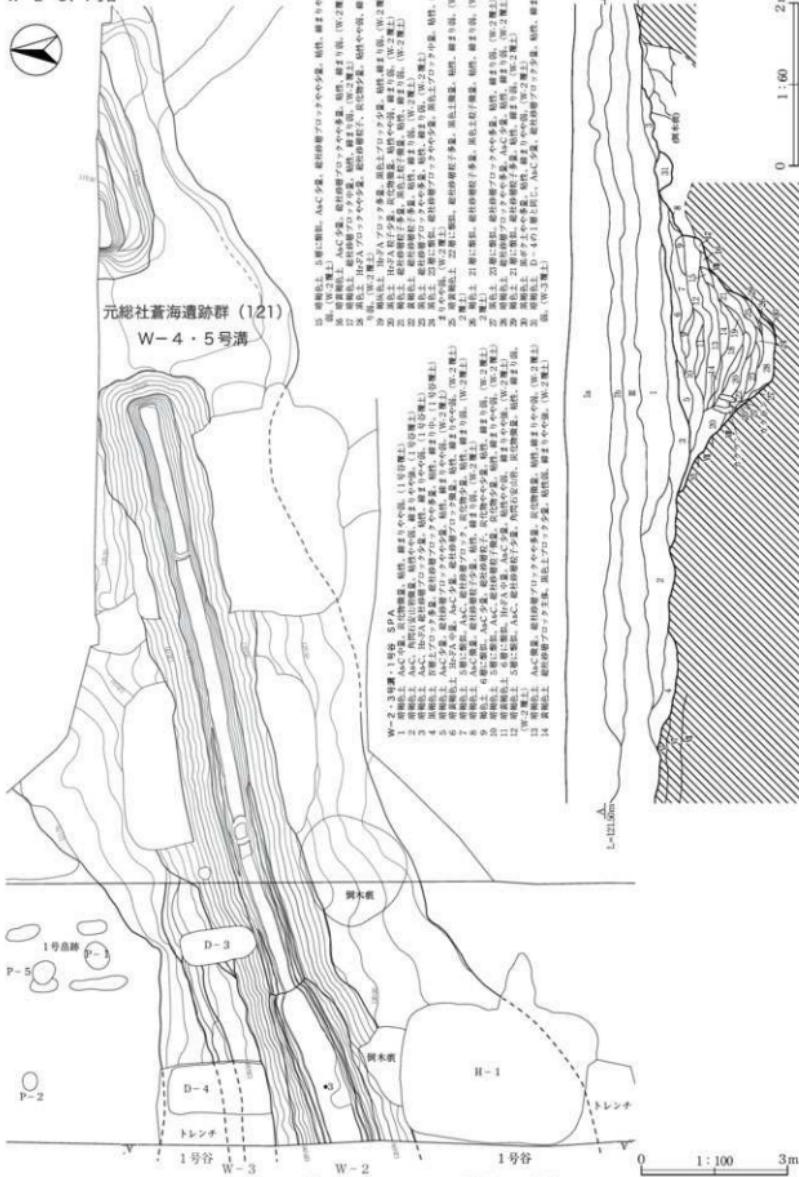


Fig. 8 蒼海(117) H-2・3号住居跡、T-1・2号竪穴状遺構、W-1号竪跡、1号竪跡

W-2・3、1号谷



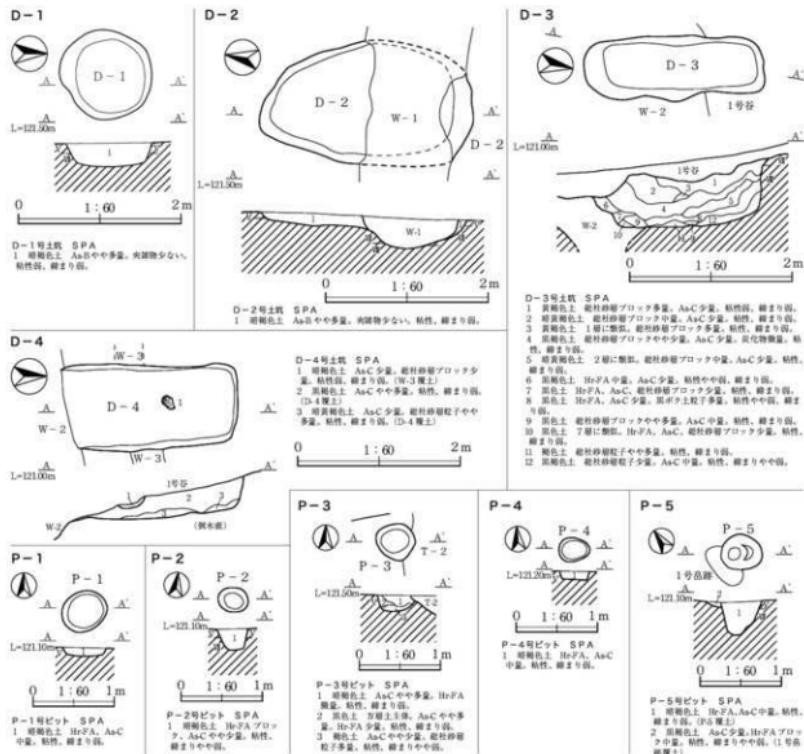
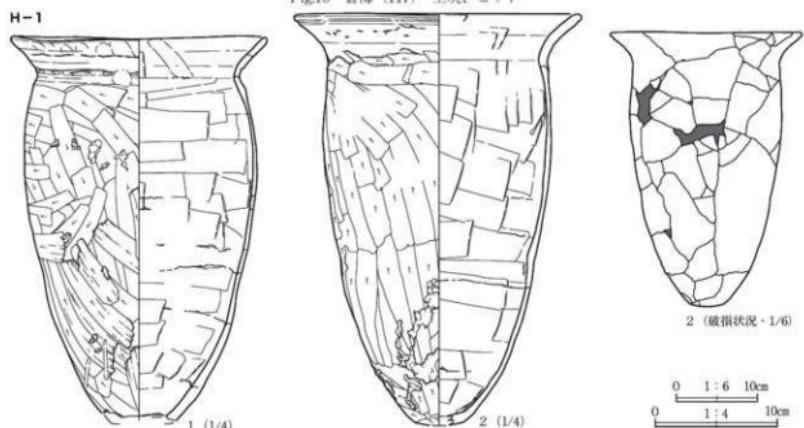


Fig.10 蒼海(117) 土坑、ビット



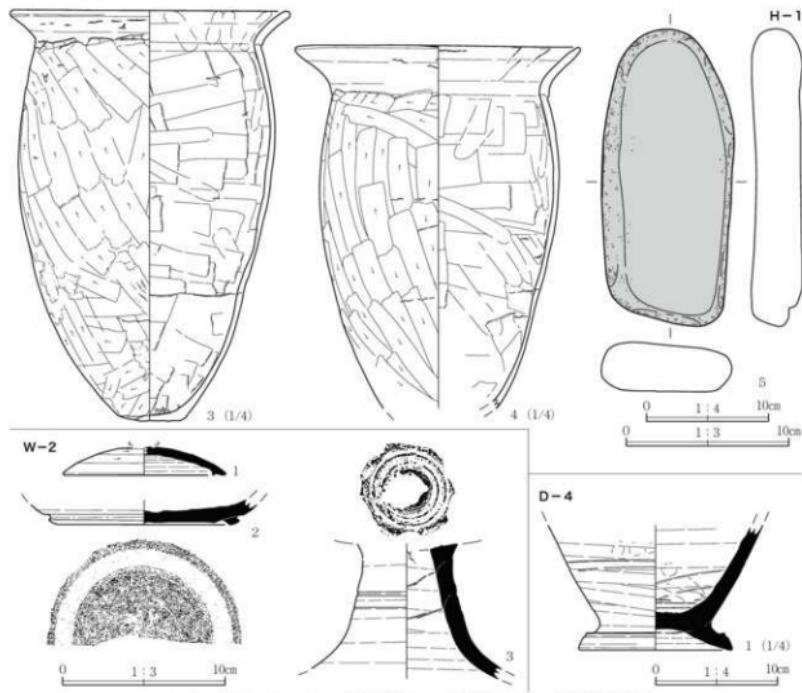


Fig.12 者海 (117) H-1号住居跡、W-2号溝跡、D-4号土坑出土遺物

2 元総社舊海遺跡群 (118)

(1) 堪穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig.13・20, PL. 3・6・7)

位置 X 141・142, Y 164・165 主軸方向 S - 5° - W 規模 東西軸 4.69 m・南北軸 5.55 m・深さ 0.32 m 面積 22.19 m² 覆土 Hr-FA や As-C を含む。床面 貼床で、カマド手前にしまりのやや強い硬化面。重複 T-1, D-7 と重複。新旧関係は本遺構 → T-1, D-7。カマド 南壁の中央で確認。全長 0.73m・燃焼室内幅 0.37 m・煙道内幅不明。上部は T-1 に破壊され、構造の詳細は不明。カマド内から出土した 9 の鬼瓦は裏面にスス状の付着物が顯著で、崩落した構築材と判断できる。2～7 の須恵器塊や小皿が集中的に出土。これらの供膳具は残存率が高く、2 次的な被熱痕は観察できない。掘り方はカマドよりも一回り大きく、円形に掘り込まれる。貯蔵穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 カマドの手前と堪穴部の北東部に不整形の掘り込みをもつ。西壁際で確認した南北方向の小溝は、堪穴部拡張前の壁周溝の可能性がある。底面はⅣ～Ⅴ層。出土遺物 覆土下層から 1、カマド内から 2～9 が出土。1 の高台付塊は還元焰焼成。底部外面は糸切り後無調整で底径は小さい。底部と体部の器形変換点に緩い高台が付く。2 の高台付塊は酸化焰焼成。器形は大きく歪み器壁は厚く、粗雑な印象を受ける。4～7 の小皿はいずれも扁平だが、4～6 は 7 に比べ底径が小さく胎土は精良。7 の器形は、地域編年の標識資料である鳥羽遺跡 B 区 332 号土坑の資料に似るが、成形に相違がある。9 は鬼瓦の左肩破片。瓦当面の紋様構成は上野国分寺の鬼瓦 B 類に類似す

るが、眉や唐草紋等など表現の細部に相違が観察できる。 時期 カマド内の出土遺物から 11世紀と推定する。

H-2号住居跡 (Fig.14・21, PL. 3・7)

位置 X 139、Y 164 主軸方向 E - 30° - S 規模 東西軸 (2.57) m・南北軸 (3.37) m・深さ 0.09 m。調査区北端で他造構の重複がひどく、カマドの周囲のみ調査。面積 (2.69) m² 覆土 As-C を含む。床面直床。カマド手前にしまりの強い硬化面。重複 H-3、W-1・2、1号探掘坑と重複。新旧関係は H-3、W-2 → 本造構 → W-1 → 1号探掘坑。カマド 東壁で確認。全長 0.72m・燃焼室内幅 0.39m・煙道内幅不明。堅穴部の壁面を掘り込んで構築される。右袖は据え穴に安山岩の棒状円窓を据えて構築材とする。燃焼室のやや奥手から立位で出土した硬質砂岩の棒状円窓は、位置関係から支脚と判断した。煙道部は確認できない。燃焼室の覆土中層には 2 と 3 の煮炊具が破損遺棄される。貯藏穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 なし。底面は埴層。出土遺物 カマド内から 1 ~ 3 が出土。1 の塊は酸化焰焼成。底部外面は糸切り後無調整で底径はやや小さい。2 の土釜は胴部上半に最大径をもつ。3 の羽釜は器形・整形・焼成の特徴から、いわゆる東毛型羽釜の可能性がある。 時期 カマド内の出土遺物から 10 世紀後半と推定する。

H-3号住居跡 (Fig.14, PL. 4)

位置 X 138・139、Y 160・164 主軸方向 E - 27° - S 規模 東西軸 (4.96) m・南北軸 (3.63) m・深さ 0.31 m。調査区北端で他造構の重複がひどく、住居跡南西部のみ調査。面積 (8.49) m² 覆土 Hr-FA や As-C を含む。炭化物がやや目立つ。床面 直床。中央部にしまりのやや強い硬化面。重複 H-2、W-1、1号探掘坑、P-6・8 と重複。新旧関係は本造構 → H-2 → W-1、P-6・8 → 1号探掘坑。カマド 1号探掘坑に破壊され残存しないが、8 層は火床面に相当する可能性がある。堅穴部東側の床面直上に分布する群は、崩落した構築材の可能性がある。貯藏穴 確認できず。柱穴 確認できず。壁周溝 確認できず。掘り方 底面は埴層。南壁際で確認した P 1 は、長軸 0.54 m・短軸 0.37 m・深さ 0.25 m。出土遺物 覆土中から土師器坏・甕や須恵器坏・甕・長頸壺がわずかに出土したが、細片のため詳細不明。 時期 重複関係から 10 世紀以前と推定する。

(2) 堅穴状造構

T-1号堅穴状造構 (Fig.15・21, PL. 4・7)

位置 X 141・142、Y 164・165 主軸方向 (N - 3° - E) 規模 東西軸 (3.79) m・南北軸 (2.41) m・深さ 0.67 m。調査区南端において造構の北半部のみ調査。形状 確認部分では不整形。覆土 埋没過程の終盤に As-B の一次の堆積層 (3・4 層) が堆積する。以下は As-C や焼土・炭化物をやや多く含む。西壁際で堆積する灰や焼土の多い層は、H-1 カマドの崩落に伴う土層と判断した。重複 H-1、D-3・11、X-1 と重複。新旧関係は H-1、X-1 → 本造構 → D-3・11。出土遺物 鉄製品の出土率がやや高い。底面直上から 1 ~ 3、覆土下層～最下層から 4 ~ 6 が出土。1 の塊は酸化焰焼成。底部外面は糸切り後無調整で底径はやや小さい。2 の小皿は扁平で底径はやや小さい。3 は雁又鐵の可能性がある。6 は大型の砥石と推測でき、溝状や薬研状の強い擦痕が顕著。 時期 As-B の堆積層と重複関係、出土遺物から 10 世紀後半～11 世紀前半と推定する。備考 本造構の底面はやや複雑で、転ばし根太ないし間仕切り溝状や壁周溝状の小溝、不整形な土坑状の落ち込みが不規則に掘り込まれ起伏が多い。一方、中央部は平坦で、しまりの強い硬化面が形成される。硬化面の一部が、地床炉のように被熱し赤化しており、同様の現象は、覆土中位や As-B の一次の堆積層直下など、埋没過程にも数箇所観察できた (焼土 1・2)。最下層の覆土は一部をサンプリングし、フレイ用いて土壤選別を試みたが、鍛造剥片等は検出できなかった。造構の構造や出土遺物の組成から、蒼海 (13) 11 区 K-1 号工房跡に類似した造構の可能性が想定できるが、未調査部分が多く詳細は不明である。

T-2号堅穴状造構 (Fig.15, PL. 4)

位置 X 137・138、Y 165 主軸方向 (N - 5° - E) 規模 東西軸 (2.67) m・南北軸 (2.41) m・深さ 0.24 m。

遺構の南西部は調査区外。 形状 確認部分では隅丸方形。 覆土 上部に As-B の一次的堆積層（b 層）が堆積し、覆土の直上は 9~11 世紀の遺物を包含する V 層に被覆される。覆土は Hr-FA や As-C を含む。 重複 P-3・5 と重複。新旧関係は本遺構→P-3・5。 出土遺物 覆土中から灰釉陶器碗、土師器・須恵器の壺・甕、底面直上から丸瓦が出土したが、いずれも細片のため詳細不明。 時期 As-B と V 層の堆積層位から 10 世紀以前と推定する。

（3）溝跡

W-1号溝跡 (Fig.15, PL. 4)

位置 X 139、Y 164~166 主軸方向 N-13°-W 規模 長さ (8.84) m・上幅 1.76 m・下幅 0.50 m・深さ 0.37 m 形状等 北東から南東へ緩く弧を描きながら走向する。断面緩い孤状。南へ勾配が下る。 重複 H-2・3、1号探掘坑、D-6 と重複。新旧関係は H-3→H-2→本遺構→1号探掘坑、D-6。 覆土 As-B を多く含む。 出土遺物 覆土中から須恵器壺が 4 片出土したが、いずれも細片のため詳細不明。 時期 覆土に As-B を多く含むことから、おおむね 12 世紀以降と推定する。

W-2号溝跡 (Fig.16, PL. 4)

位置 X 140、Y 164・165 主軸方向 N-15°-W 規模 長さ (6.58) m・上幅 2.02 m・下幅 0.44 m・深さ 0.41 m 形状等 北から南へ走向する。断面緩い孤状。南へ勾配が下る。 重複 H-2、I-3、DB-1、D-1・2 と重複。新旧関係は本遺構→H-2→I-3・DB-1→D-1・2。 覆土 Hr-FA や As-C を含む。 出土遺物 覆土中から須恵器壺・甕、土師器壺、平瓦が出土したが、いずれも細片のため詳細不明。 時期 重複関係から、10 世紀以前と推定する。

（4）探掘坑

1号探掘坑 (Fig.16, PL. 4)

位置 X 139・140、Y 164 主軸方向 (E-15°-N) 規模 5.51 m × 3.52 m の範囲で確認。深さ 0.87~1.14 m 形状等 円形や不整形な土坑状、溝状の掘削単位が複数重複することにより、全体の平面形は不整形な大型の土坑状を呈し、底面には起伏が顕著。 重複 H-2・3、W-1、I-1、P-8 と重複。新旧関係は H-3→H-2→W-1、P-8→本遺構→I-1。 覆土 全体的に As-B を多く含む。IX 層の粘質土ブロックや総社砂層のブロックを多く含む粒度の粗い土と、Hr-FA・As-C や総社砂層の粒子を含む粒度のやや細かい土が互層をなす。複雑な重複関係が観察でき、探掘地点を少しづつ変えながら、埋め戻しを伴いつつ、複数回にわたり再掘削されたと推測できる。 出土遺物 覆土中から常滑焼甕、灰釉陶器甕、須恵器蓋・壺・甕、土師器甕が出土したが、いずれも細片のため詳細不明。 時期 重複関係と、覆土に As-B を多く含むことから、12 世紀以降と推定する。 備考 各掘削単位の底面は、粘質土であるⅧ・IX 層を目安としており、この粘質土の採掘を目的とした探掘坑と推測できる。Ⅷ・IX 層に相当する粘質土層は、周囲では蒼海 (2) 7 トレンチ、蒼海 (33) 3 区、小見内 IX 遺跡 E 区などに確認できることから、総社砂層の上位でまだらに分布すると推測でき、蒼海 (33) 3 区でも同様の探掘坑が調査されている。なお、I-1 は本遺構の埋没過程で構築されているが、探掘坑と同位置に井戸が構築される事例は、蒼海 (33) 3 区粘土探掘坑 [7 世紀後半]、草作 V 遺跡 D-12・18・20・22・23 号土坑 [10 世紀以前]、小見内 IX 遺跡 E-1 号粘土探掘坑 [8 世紀前半] に確認でき、探掘放棄後の土地利用のひとつと想定できる。

（5）井戸、土坑、ピット (Fig.16~18・21, PL. 4・5・7)

I-2・3 は南北に隣接する。I-3 の覆土は総社砂層ブロックを多く含み粒径が粗く、I-2 の覆土は As-B を多く含む。それぞれの位置関係と埋没状況から、I-3 は I-2 の掘削排土をもって埋め戻された可能性があり、I-2 の埋没は As-B の降下以降であることから、これらは 11 世紀後半~12 世紀前半頃の作為と判断できる。また、I-2-1 の黒色土器小塊にみられる、内外面の黒色処理とロクロを用いた細密な横位のヘラ

ミガキによる最終調整は、いわゆる畿内系黒色土器の特徴に類似する。D-7は、主軸方向や形状・規模から土坑墓の可能性があるが、人骨は出土しなかった。D-10は平面三角形の浅い土坑で、覆土には焼土・炭化物・灰が目立つ。何らかの焼成坑の可能性があるが、焼骨片や生焼け・焼けハゼの土器片等は出土しなかった。

なお、各遺構の計測値については、Tab. 5に示す。

(6) 土坑墓

DB-1号土坑墓 (Fig.17・21, PL. 5・7)

位置 X 140, Y 164・165 主軸方向 (N - 6° - E) 規模 東西軸 (0.79) m・南北軸 (2.20) m・深さ 0.15 m。 形状 長楕円形。底面は起伏がある。 覆土 Hr-FA や As-B を含む單層で粒度は細かい。直上の確認面は As-B 混土層のIV層直下であり、本遺構の残存深度を考えると、周囲には中世以降の削平を伴う地形変更を推測できる。 重複 W-2、P-1と重複。新旧関係は W-2 → 本遺構 → P-1。 出土遺物 被葬者は20歳代の女性と鑑定された (VI章参照)。北頭位の仰臥伸展葬で顔面は東に向く。底面や土層断面に棺の痕跡は確認できず鉄釘も出土しなった。頭上には1の須恵器高台付塊が、底面から3cmほど浮いた位置に正位で安置される。口縁部の屈曲が強く高台が高い。内面はやや磨耗しており使用痕と判断できる。2の壺も3cmほど浮いた位置から出土したが破損している。酸化焰焼成で底部外面は糸切り後無調整、底径はやや小さい。口元には3~6の砥石が重ねて安置される。いずれも良く使い込まれており、小振りで薄く、一度欠損した砥石を再度利用したものと推測できる。4の表面上部には敲打痕が観察でき、捉砥として穿孔を試みた可能性がある。 時期 重複関係と出土遺物から10世紀後半と推定する。

(7) 性格不明遺構

X-1号性格不明遺構 (Fig.18・21, PL. 5・7)

位置 X 142・143, Y 164・165 主軸方向 (E - 34° - N) 規模 東西軸 (2.67) m・南北軸 (2.25) m・深さ 298 m。 形状 不整長楕円形。壁面は大きく抉れ、底面は擂鉢状に窪む。 覆土 1~19層は、Hr-FA や総社砂層ブロックを多く含む粒度の粗い黄褐色系の土と、粒子状の Hr-FA や As-C を含む粒度の細かい暗褐色～黒色系の土が互層となり、埋め戻しと壁面の崩落と判断できる。20層は Hr-FA を主体とするが、火山灰のフォール・ユニットは層中で土塊状に混在しており、一次的な堆積ではない。その直下の21~25・26層は焼土・炭化物・灰を多く含む。以下の層は、黒ボク土と総社砂層の大ブロックを多く含む黒色系の土と、総社砂層を主体とする黄褐色系の土が互層に堆積し、いずれも粒度は非常に粗い。最下層と地山の間に黒色土層等の間層は観察できない。 重複 T-1、D-11と重複。新旧関係は本遺構 → T-1 → D-11。 出土遺物 1の鉄製品と2の砥石は20層よりも上層から出土。上層からは灰釉陶器壺、土器壺壺、須恵器壺・壺が出土したが、細片のため詳細不明。20層以下は出土遺物なし。 時期 重複関係から10世紀以前と推定する。 備考 20層以下の堆積と地山の基本層序とは、落差 1.30m 程の地点的な断層状となり、空洞化した地下の天井が Hr-FA 堆積以降のある時期に崩落したような堆積過程を示す。底面と最下層の状態や遺物の出土状況から、崩落以前の空洞に人為や湧水・水流の痕跡は認め難く、Hr-FA の堆積以降に何らかの自然災害で形成された、陥没断層の可能性がある。また、上層の堆積状況と遺物の出土状況から、地表に現れた窪地は10世紀頃に埋め戻された可能性がある。なお、結果として10世紀以降の攪拌が及ばなかった20層直下には、As-C 混入黒色土に相当する層位に、焼土・炭化物・灰が多く混入し (21~25・26層)、古墳時代前～中期頃の耕起層が残存すると推測できる。該期の畠跡や耕起の痕跡は、周辺では蒼海 (28) で調査された弥生後期～古墳前期に属する住居跡群の埋没過程や、閑泉明神北N遺跡の As-C 混土下面畠に確認できる。

(8) 遺構外出土遺物 (Fig.21, PL. 7)

1の灰釉陶器碗は、虎渓山1号窯式期の特徴をもつ。搅乱内から出土した。2の石製品は、溝状の強い擦痕が顯著で全面がよく磨耗しており、砥石と類推できる。平安時代の遺物包含層であるV層中から出土した。

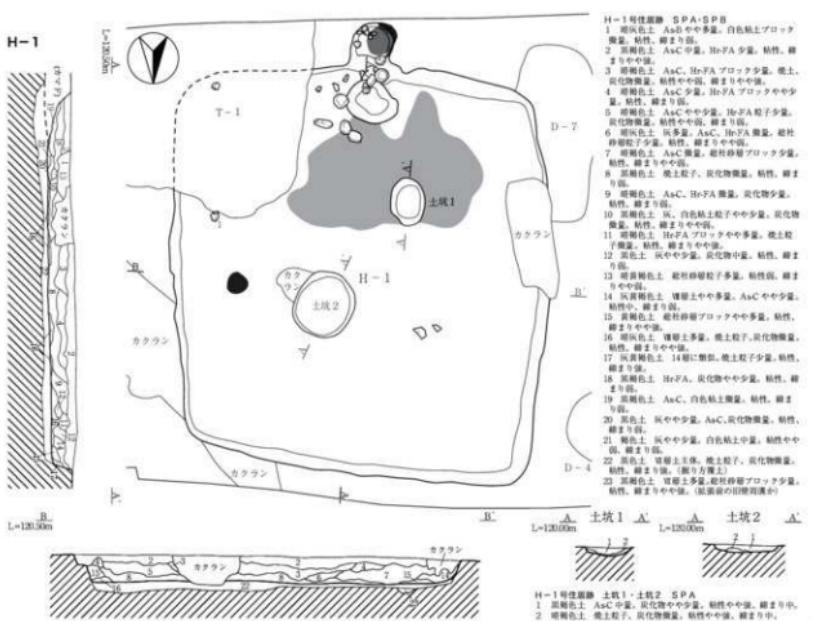
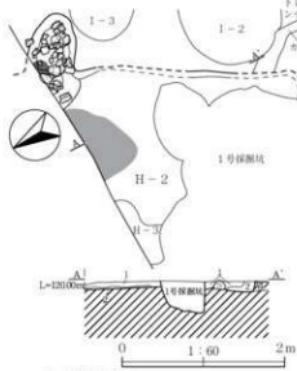
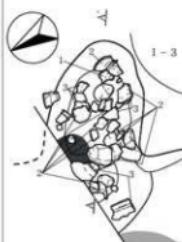


Fig.13 蒼海(118) H-1号住居跡

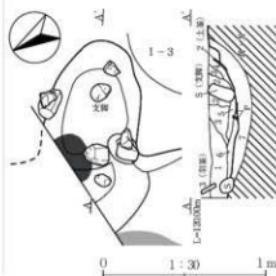
H-2



H-2カマド遺物出土状況



H-2カマド



H-2号住居跡カマド SPA

- 黒褐色土 Aa-C, 地上部プロック少, 黄褐色, 地表土中量, 粘性, 緩まりやや弱。
- 黄褐色土 Aa-C, 地上部柱子少, 黄褐色地表土中量, 粘性, 緩まりやや弱。
- 黑褐色土 Aa-C, 地上部柱子少, 黄褐色地表土中量, 粘性, 緩まりやや強。
- 黑褐色土 Aa-C, 桧木柱子や少量, 粘性, 緩まりやや強。
- 黑褐色土 Aa-C, 地上部柱子少, 黄褐色地表土中量, 粘性, 緩まりやや強。
- 黄褐色土 Aa-C, 桧木柱子少, 黄褐色地表土中量, 粘性, 緩まりやや強。
- 黒褐色土 桧木柱子プロックや少量, 地上柱子や少量, 粘性, 緩まりやや強。(廻り方覆土)

H-3



H-3掘り方

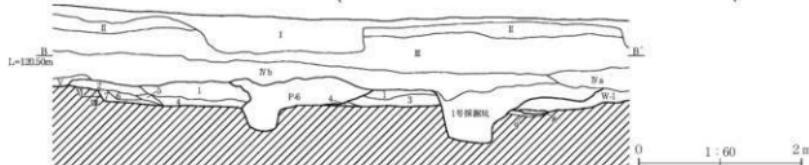
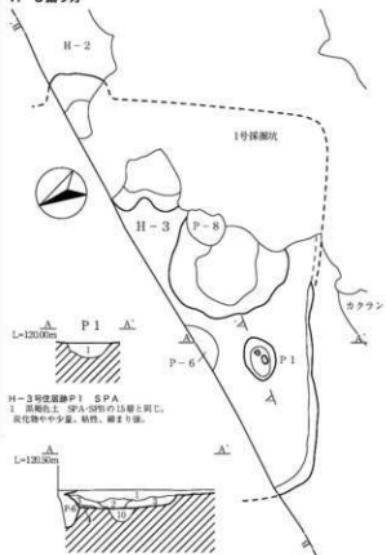
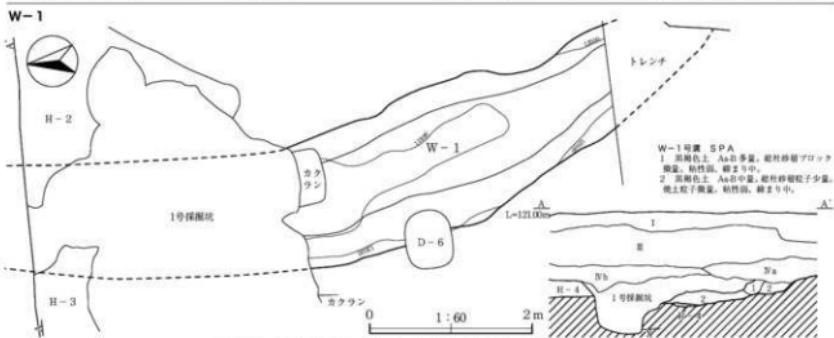
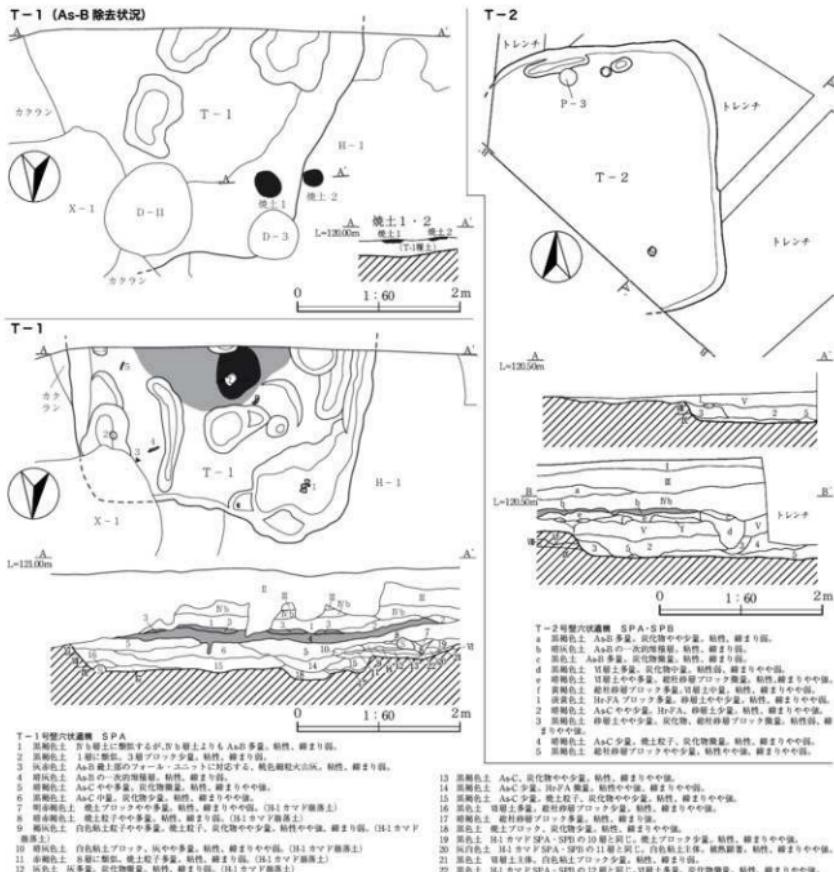


Fig.14 蒼海(118) H-2・3号住居跡



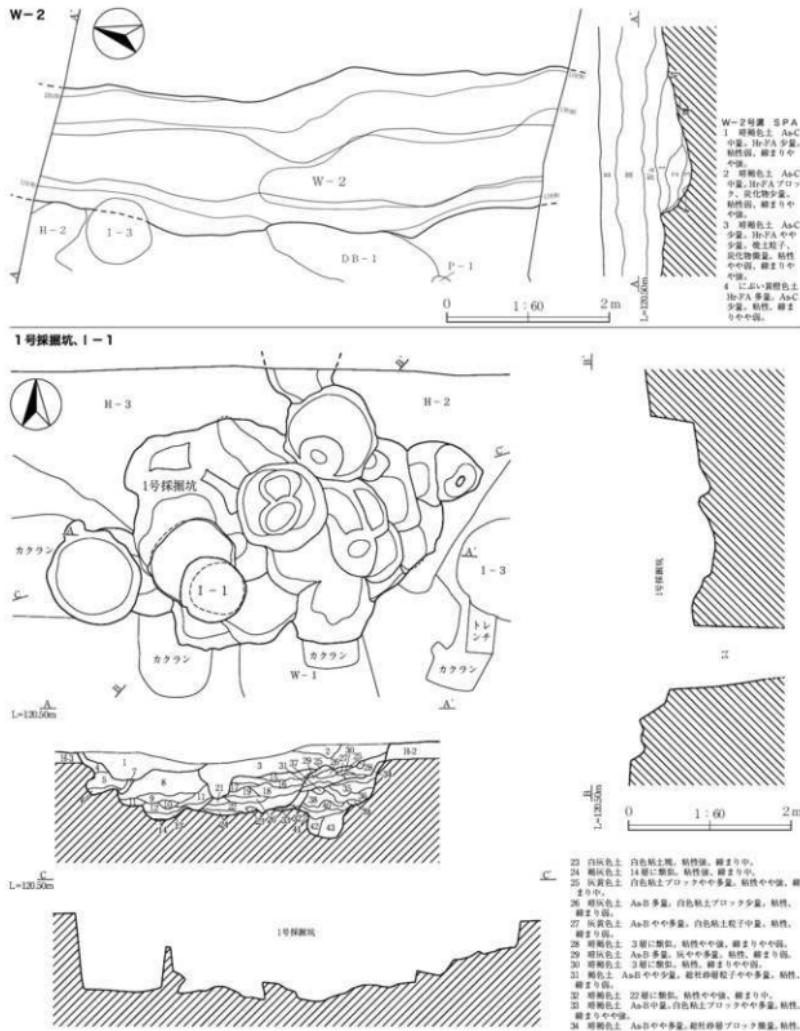


Fig. 16 蒼海(118) W-2号溝跡-1号採掘坑-1-1号井口

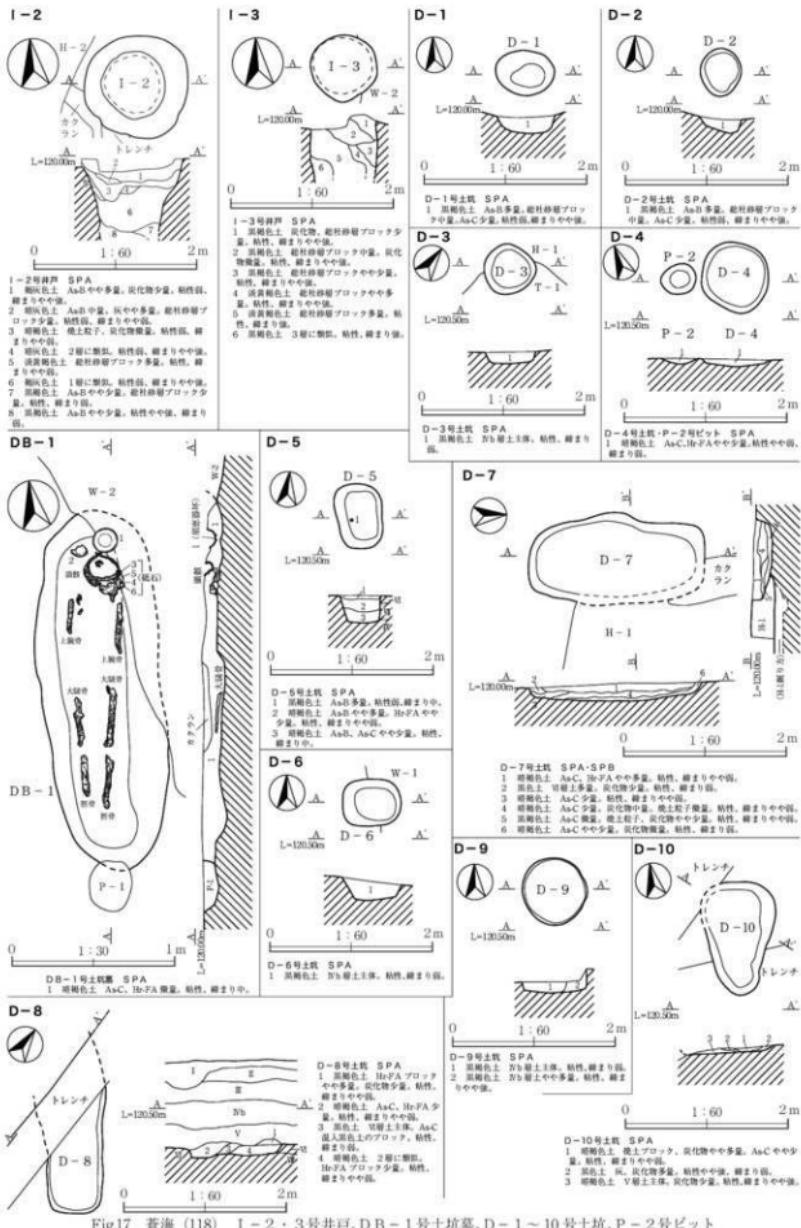


Fig.17 菊海(118) I-2・3号井戸、DB-1号土坑墓、D-1～10号坑、P-2号ピット

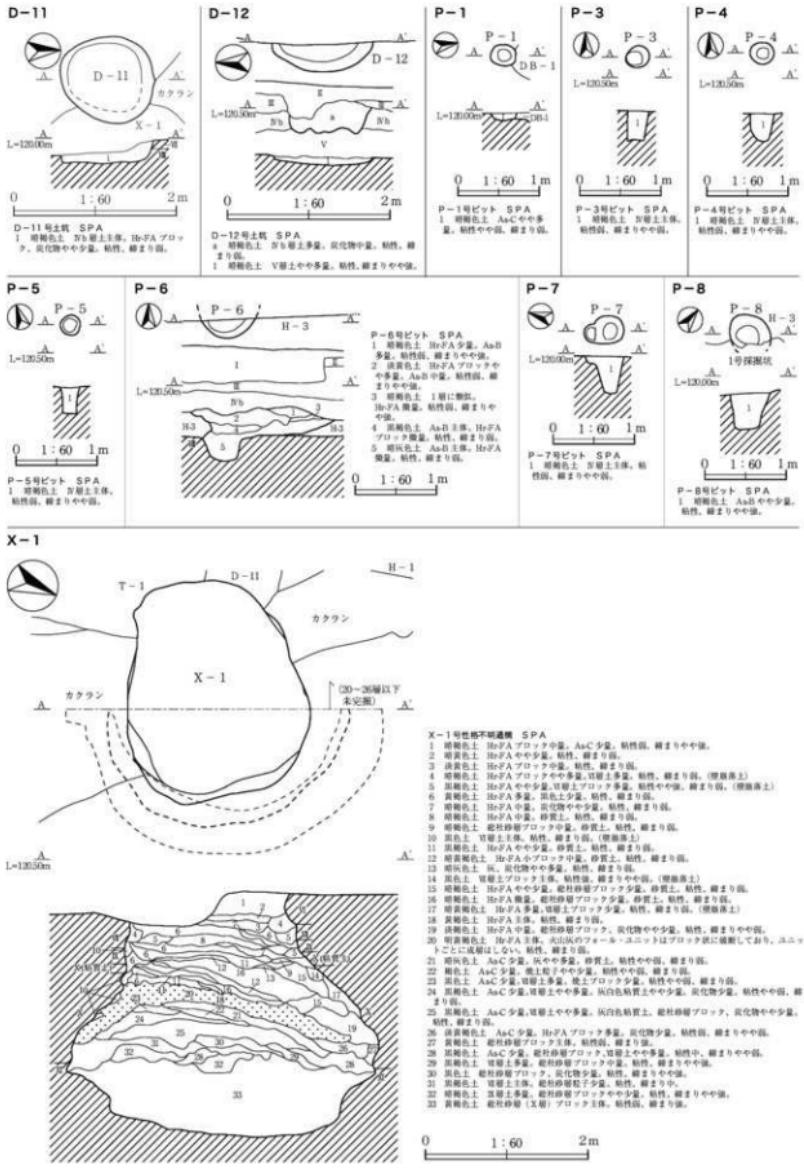


Fig.18 蒼海(118) D-11・12号土坑、P-1・3～8号ピット、X-1号性格不明透構

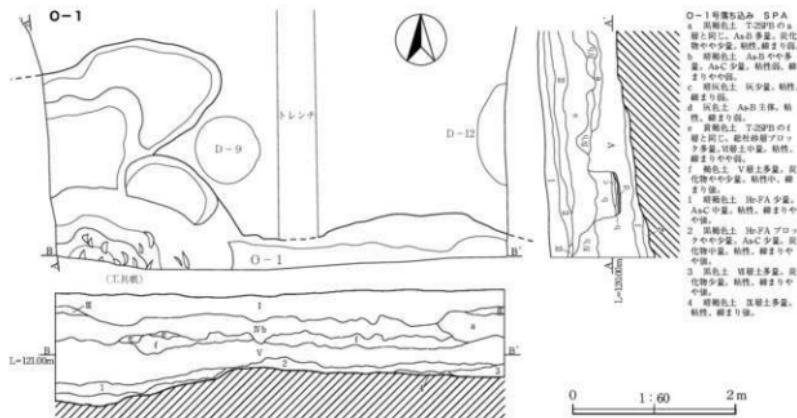


Fig.19 蒼海(118) O-1号落ち込み

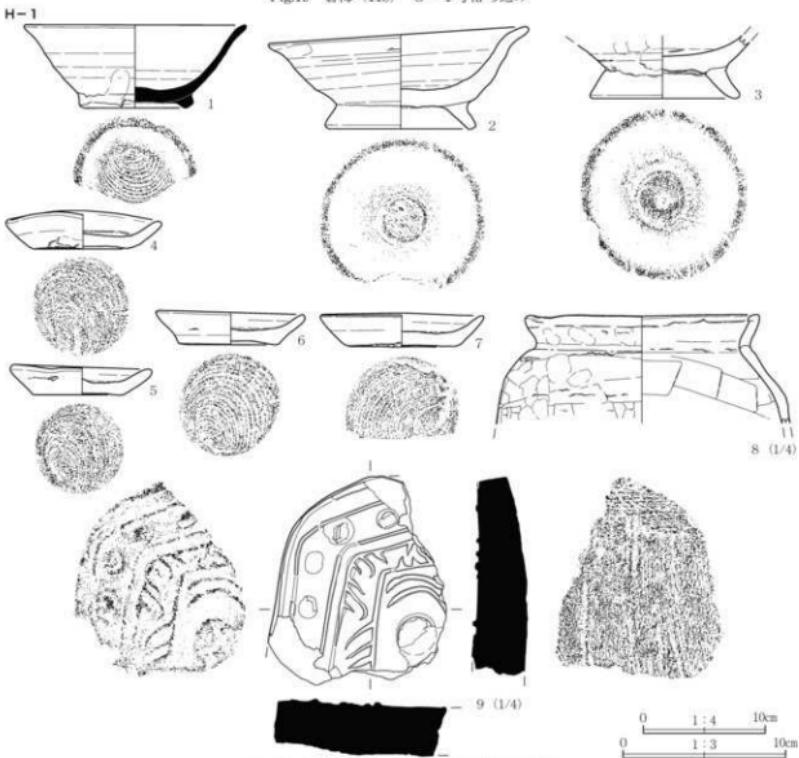
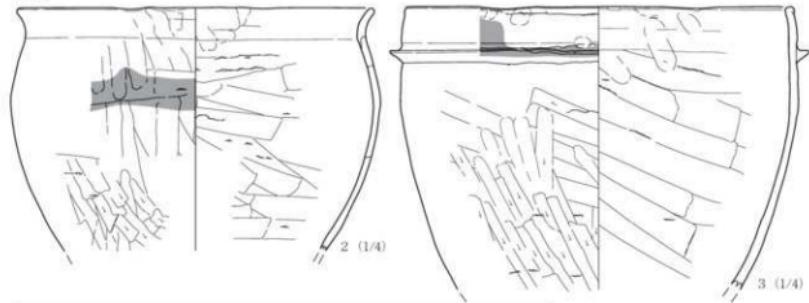
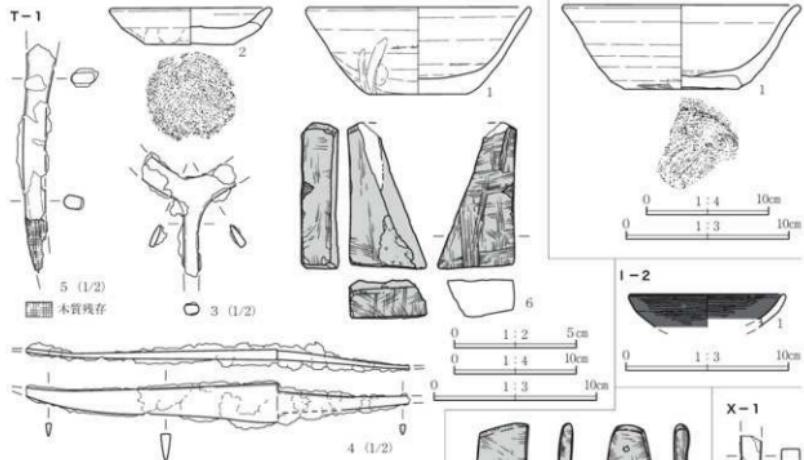


Fig.20 蒼海(118) H-1号住居跡出土遺物

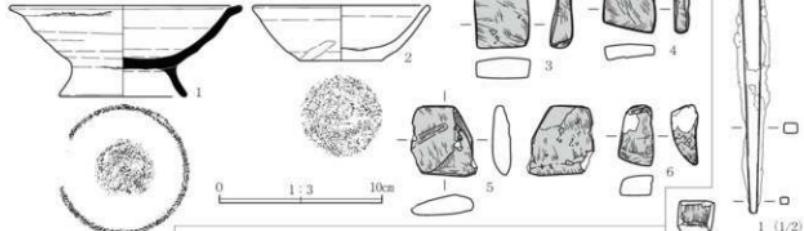
H-2



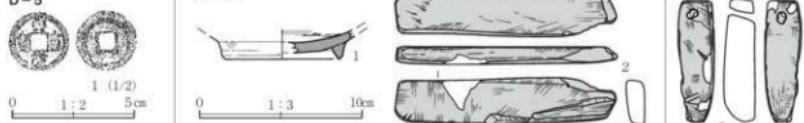
T-1



DB-1



D-5



遺構外



Fig.21 蒼海 (118) H-2号住居跡、T-1号堅穴状遺構、I-2号井戸、DB-1号土坑墓、D-5号土坑、X-1号性格不調遺構、遺構外出土遺物

Tab. 5 元経社蒼海遺跡群(118) 井戸、土坑、ピット計測表

遺跡名	位 置	面積	深さ	平面形状	主な遺物	総 長
I - 1	X 125~130 Y 155~160	0.62	0.78	1.42m	円形	X 125~130 Y 155~160
I - 2	X 135~140 Y 155~160	1.25	1.25	(1.01)	円形	X 135~140 Y 155~160
I - 3	X 140 Y 160	0.78	0.27	0.66m	丸太桶	X 140 Y 160
D - 1	X 130 Y 160	0.71	0.32	0.39	円形	X 130 Y 160
D - 2	X 130 Y 160	0.59	0.50	0.36	円形	X 130 Y 160
D - 3	X 141~142 Y 160	0.58	0.34	0.11	円形	X 141~142 Y 160
D - 4	X 130 Y 160	0.61	0.26	0.08	円形	X 130 Y 160
D - 5	X 130 Y 160	0.79	0.58	0.34	圓筒形	X 130 Y 160
D - 6	X 130 Y 160	0.72	0.58	0.28	圓筒形	X 130 Y 160
D - 7	X 140~141 Y 160	2.15	1.00	0.21	圓筒形	X 140~141 Y 160
D - 8	X 140~141 Y 160	2.10	0.71	0.18	圓筒形	X 140~141 Y 160
D - 9	X 140~141 Y 160	0.63	0.29	0.27	円形	X 140~141 Y 160

Tab. 6 元経社蒼海遺跡群(118) 出土遺物観察表

H-1

No	出土位置	種類・形態	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
1	No.25	灰塗瓦 高台打丸	(15.5)	16.3	5.1	粘土片岩 内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: 淡青 外: 淡青	内: ロクナナ 外: 双刃切石目	1.4焼青、 施土上部。
2	No.17	灰塗瓦 高台打丸	15.8	8.8	6.2	内: 門石 外: 灰褐色 内: 灰褐色 外: 白褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	施土上 部、 焼成後。
3	No.23	灰塗瓦 高台打丸	-	8.8	4.9	内: 門石 外: 黒褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	施土下部 焼成後。
4	No.13	灰塗瓦 小屋	9.6	5.7	2.4	内: 門石 外: 黒褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	完全 焼成後。
5	No.20	灰塗瓦 小屋	8.4	5.5	1.8	内: 白色粘 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	完全、リメイク。 焼成後。
6	No.22	灰塗瓦 小屋	9.0	5.8	2.1	内: 門石 外: 黒褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	完全、カマド内。 焼成後。
7	No.18	灰塗瓦 小屋	(10.0)	6.6	2.1	内: 白・赤色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	2.2焼青、 カマド内。 焼成後。
8	No.14.5	土器	18.9	-	(8.9)	チャコ 内: 黑褐色	内: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	1.1焼青、1.4 土器。
9	No.19	瓦	(17.1)	(14.6)	(4.6)	内: 白 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黄褐色 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	完全、瓦と 土器を組み 立てて置いた 形態。

H-2

No	出土位置	種類・形態	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
1	No.29	灰塗瓦 高台	(14.0)	(7.0)	5.2	粘土片岩 内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	1.5焼青、カマド内。 焼成後。
2	No.1~24.24. 土器	土器	(28.6)	-	(19.9)	チャコ 内: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	1.1焼青、1.5残存。 施土下部。
3	No.14.2~ 14.17. 土器	土器	(31.5)	-	(23.2)	焼造、少偏、 斜面	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	1.1焼青、1.6残存。 カマド内。 施土下部。

H-3

No	出土位置	種類・形態	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
1	No.5	灰塗瓦 高台	(12.6)	6.0	5.4	内: 黑・赤・赤褐色 外: 黑・赤・赤褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	2.3焼青、 施土下部。 焼成後。
2	No.2	灰塗瓦 小屋	9.6	5.4	2.3	内: 白・赤色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	2.2焼青、高台面上。 施土下部。
No	出土位置	種類・形態	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
3	No.25	灰塗瓦 小屋	(20.9)	(14.9)	9.8	粘土 内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	完全、二又式。 施土下部。
4	No.10.	灰塗瓦 小屋	(15.0)	16.6	6.4	粘土 内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	完全、高台面上。 施土下部。
5	No.12.	灰塗瓦 小屋	(9.0)	11	6.4	粘土 内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	完全、 施土下部。
No	出土位置	種類・形態	高さ	幅	厚さ	石村	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
6	壁下土器	土器	36.0	4.9	2.3	硬質粘土 内: 黑褐色 外: 黑褐色	-	黑褐色	127.5g	全表面研磨済。素透、 素透の裏側は 施土である。

I-1

No	出土位置	種類・形態	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
1	No.1	灰塗瓦 高台打丸	12.9	7.5	5.6	白い粘土 内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	完全、高台面に 施土あり。
2	No.2	灰塗瓦 外	10.6	5.0	3.4	内: 門石 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	2.2焼青、 施土下部。

D B-1

No	出土位置	種類・形態	口径	底径	高さ	施土	焼成	色調	形態・成・整形・文様等の特徴	掲載状況・備考
1	No.1	灰塗瓦 高台打丸	12.9	7.5	5.6	白い粘土 内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: 斜面切石目	完全、高台面に 施土あり。
2	No.2	灰塗瓦 外	10.6	5.0	3.4	内: 門石 外: 黑褐色	内: 黑褐色 外: 黑褐色	内: 淡青 外: 黄褐色	内: ロクナナ 外: ロクナナ	2.2焼青、 施土下部。

No	出土位置	種別	直標	長さ	幅	厚さ	石材	病歴	色調	重量	形態、成・形態、文様等の特徴		現状状況・備考
											頭	足	
3	墓内面左上	石製品	石製品 M1	67	34	1.5	青白石	-	灰オリーブ緑	36kg	全表面磨削面、欠損した鏡面の一次剥離。	完存。	
4	底面左上	石製品	石製品 M1	57	33	1.0	麻灰岩	-	灰黄色	33kg	全表面磨削面、鏡面の一部に削り凹面形態。穿孔を意識したか。表面「丁」字彫りの二次剥離。	完存。	
5	底面左上	石製品	石製品 鏡石	43	41	1.3	麻灰岩	-	灰黄色	22kg	全表面磨削面、欠損した鏡面の一次剥離。	完存。	
6	底面右上	石製品	石製品 鏡石	37	22	1.6	麻灰岩	-	灰黄色	13kg	全表面磨削面、欠損した鏡面の一次剥離。	略完存。	

D - 5

No	出土位置	種別	直標	頭	足	時代年代	材質	内径 (mm)	外径 (mm)	厚さ (mm)	重量	現状状況・備考
1	No.1	昭和元年	起来	1008年			鋼合金	24.1	70	17	27g	立合・復土土堤。 銅文書目。

X - 1

No	出土位置	種別	直標	頭	足	時代年代	材質	内径 (mm)	外径 (mm)	厚さ (mm)	重量	現状状況・備考
1	覆土	石製品	封か	(10.7)	0.8	0.6	灰	-	-	23kg		上部端部削除。 覆土上層。
No	出土位置	種別	直標	頭	足	時代年代	石材	病歴	色調	重量	現状状況・備考	
2	覆土	石製品	封か	75	23	20	青白石	-	灰白	35.2kg	全表面磨削面。表面に浮遊石。後孔。	地穴方。 覆土上層。

遺構外

No	出土位置	種別	直標	頭	足	時代	石材	病歴	色調	重量	現状状況・備考	
1	覆土	石製品	封か	(10.7)	0.8	0.6	灰	-	-	23kg		
No	出土位置	種別	直標	頭	足	時代年代	石材	病歴	色調	重量	現状状況・備考	
2	覆土	石製品	封か	75	23	20	青白石	-	灰白	35.2kg	全表面磨削面。表面に浮遊石。後孔。	地穴方。 覆土上層。

VI 元総社蒼海遺跡群（118）出土古代人骨

橋崎 修一郎

はじめに 元総社蒼海遺跡群（118）は、群馬県前橋市元総社町に所在する。前橋市教育委員会による発掘調査が、平成 28（2016）年 3 月に実施された。なお、実務は、技研コンサル株式会社が担当している。本遺跡の D B - 1（土坑墓 1）より、10 世紀代の平安時代人骨が検出されたので、以下に報告を行う。

1. 被葬者の埋葬状態 被葬者は、長さ（南北）約 2.20m・幅（東西）約 0.79m・深さ約 0.15m の楕円形土坑から検出された。出土人骨の出土位置より、頭位を北にした仰臥伸展葬で埋葬されたと推定される。なお、群馬県内ではまだ古代の人骨出土例は非常に少ないが、そのほとんどが仰臥伸展葬である。群馬県内における埋葬方法の大きな傾向としては、古代が伸展葬・中世が横臥屈葬・近世が座葬である。但し、一部には例外があることも注意されたい。

2. 被葬者の個体数 出土人骨の出土部位には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は 1 個体であると推定される。

3. 被葬者の性別 群馬県内のみならず日本国内では、いまだに古代人骨の出土例が非常に少なく、まとまったデータはない。そこで、計測値の比較は、中近世人及び現代日本人で行うこととする。出土歯の上頸左右 M1（第 1 大臼歛）の歯冠計測値を比較すると、比較的大きく男性的である。しかし、中世人骨の頭蓋骨の内、後頭骨の外後頭隆起厚の研究では、男性が平均 17.5mm で女性が 15.0mm である（長岡・平田



Fig.22 DB - 1 人骨出土状態（南から）

Tab. 7 元総社蒼海遺跡群（118）DB - 1 出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	元総社蒼海 118		中世時代人*		江戸時代人*		現代人**	
	DB1	Matsuura, 1995	DB1	Matsuura, 1995	江戸時代人	江戸時代人	江戸時代人	江戸時代人
上 M1	MD	10.5	10.4	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68
	BL	12.1	12.2	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2. 術名は、MBI 第 1 大臼歛を意味する。

註3. 牙齒縫合片は、MBI 第 1 大臼歛（猿牙縫合否）を意味する。

註4. 「*」は、MATSUURA, 1995 より引用。

註5. 「**」は、椎田(1999)より引用。

2005）。本人骨は、13mmと比較的小さく、女性的である。このことは、比較的小柄で華奢な男性か、比較的大柄な女性であると示唆される。しかしながら、四肢骨が比較的華奢であるため、ここでは被葬者の性別は女性であると推定しておく。

4. 被葬者の死亡年齢 出土歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1度の状態である。したがつ

て、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。但し、出土歯が上顎左右のM1のみであるため、場合によっては、歯の生前脱落が多く他の歯と咬耗が進まなかった可能性もあり、老齢であった可能性も否定できない。

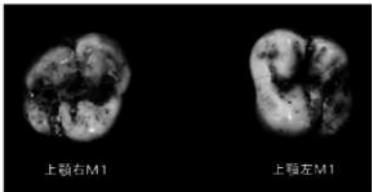


Fig.23 DB-1人骨上顎歯咬合面観

引用文献

権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』、67: 151-163

MATSUMURA, Hiroyuki 1995 "A microevolutionary history of the Japanese people as viewed from dental morphology". "National Science Museum Monographs", No.9, National Science Museum, Tokyo

長岡朋人・平田和明 2005 「中世日本人の破損頭蓋の性別判定」『Anthropological Science』、113: 17-26

VII 発掘調査の成果と課題

今回の調査地点は上野国府域の推定域内に位置し、御靈神社の鎮座する谷を挟み東側の微高地には、一連の国府推定地を間近に望むことができる。その政治史的な地勢を反映するかのように、蒼海(117)では、8世紀に開削された大規模な溝跡が見つかり、蒼海(118)では、住居跡のカマドから上野国分寺と類似の瓦当紋様をもつ鬼瓦が出土した。一方で、蒼海(117)H-1のカマドに残された土器群や、蒼海(118)の土坑墓には、現実の国府城を生きた人々の生活習俗を、垣間見るかのようでもある。そこで本節では、これらの遺構や遺物について、若干の検討を加えつつ紹介してみたい。

1 元總社蒼海遺跡群(117)

推定国府域を縱走する溝 W-2は、上幅294m・深さ126m、北東に16°の走向をもつ溝で、北側の上端にはW-3の小溝が付属する(Fig.9)。7世紀後半～8世紀前半の住居跡を破壊し、10世紀には谷地化することから、8世紀中頃に開削されたものの、9世紀末頃には本来的な機能を喪失していたと推定できる。なお、この溝跡の大半は、連続的に調査を行った蒼海(121)で調査しており、具体的な検討はその報告に譲ることとしたい。

この溝跡は、直接的には蒼海(121)W-4・5号溝に続く。周辺では、蒼海(1)4トレンチW-1、蒼海(6)W-4、蒼海(17)牛池川調査区W-5、蒼海(20)W-1・2、小見内Ⅲ遺跡3区W-3・4、A-1・2、12区A-1、小見内Ⅵ遺跡A区W-4・5に類似の溝跡が確認できる。その北端は牛池川低地平野の崖線に達し、北から西へ大きく湾曲しながら、今回の調査地点まで約500mにわたり連続する可能性がある。しかし、以南の調査地点では、現状で類似する溝跡を確認できない。

今回の報告では、その検討課題をいくつか挙げ、現時点での小結としたい。まず溝跡の時期について、先述した調査事例の中には、住居跡の重複例が確認できる。その前後関係を把握することにより、溝跡の時期を知ることができるだろう。また、地点によっては新旧2時期の溝跡が隣接して走向したり、再掘削のように重複するこ

とから、溝跡の変遷過程を考える必要がある。次いで溝跡の性格については「区画」か「水利」かが問題となる。前者の検討には、蒼海（7・9・58）・関泉橋遺跡など、今や20地点以上に調査事例がある、上野国府に間連する区画溝との形状・規模・走向方向・時期の比較が課題となる。一方、後者の検討には、底面傾斜の程度、土橋など付属する構造物・砂堆や葉理構造、「洗掘」や「歓穴」など水流による侵食痕跡の有無を把握することが課題となる。また、W-2と同様に埋没過程で硬化面が確認された地点もあり、道路としての二次的な利用についても検討する必要はある。

いずれにせよこの溝跡は、その開削時期と規模を考えた時、上野国府域形成期の土地利用を考える上で、重要な意味を持つのだろう。

カマド廃絶における「所作」の一例 H-1のカマドは、廃絶時の状況を良く留めていた。遺物がほとんど出土しなかった堅穴部とは対照的に、カマドの周辺には複数の長胴甕が遺棄されていた。その内、1と2は廃絶に伴うものと判断でき、使用や廃棄の痕跡も良く残存していた。そこでここではカマドの残存・崩落状況と、長胴甕の使用・廃棄痕跡から、このカマドの廃絶時に想定できる「所作」について考えてみたい。

Fig.24には、1と2の長胴甕の出土状況と使用・廃棄痕跡を示した。出土状況から、どちらの長胴甕もこのカマドで使われたと推測できる。それぞれの内面には、加热により内容物が漸減した痕跡と判断できる輪状のコゲ（A）が段階的に観察でき、本来これらは、燃焼室の天井部へ「嵌め殺し」に設置されたと推測できる。一般的なカマドに比べ燃焼室内壁幅がやや広いためか、火道は変則的だったようで、使用痕から甕本来の架設状態は判断できない。甕の外面に付着する粘土は、ススとの重複関係を考慮すると、天井構築材に起因するものと、甕自体の漏水防止に塗布されたものが混在する可能性が残るが、観察による分離は難しい。ただし付着する粘土の上端はほぼ水平に途切れており、燃焼室天井外壁の位置を示すと判断できる（B）。燃焼室内壁の被熱範囲はSPCにCとして見通しで示したが、この数値に粘土付着位置の最大値を合計すると、18cm（C）+26cm（B）=44cm（燃焼室天井外壁高の概数）となり、カマド本来のおおよその量感を知ることができる。

発掘の過程では、その崩落土層を検出した。崩落土層中にある1は底部以外が完存し、直下にある2は接合状況に人為的な打点（③）が観察でき、崩落は自然の風化ではなく、人為による破壊と推測できる。ただし、残存状態から、甕は天井の破壊前に一度取り外されていただろう。崩落土との層序から、2は外した後に焚口部の裾へ横に置かれて、胴部から破碎され、一方、1はカマドの破壊中に、おそらくは底部を打ち欠いたうえで、燃焼室へ横位に安置されている。また、どちらの甕の外面も、出土状況の下面側に、付着した粘土の上から2次被熱

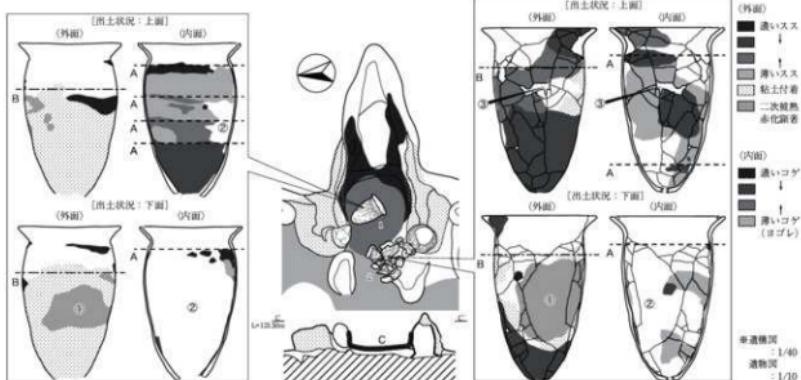


Fig.24 蒼海(117)H-1号住居跡カマドの遺物出土状況と使用・廃棄痕跡

による赤化（①）が観察でき、その内面は酸化によって使用痕の連続性が切断されている（②）。本跡は焼失家屋とは考え難いことから、これらの甕は、カマド廃絶の過程において底面側から熱を受けていた可能性がある。

このカマドは、土器が2次被熱の痕跡を留めるような熱量を残した状態で、複雑な手順を経て廃絶されたのだろうか。仮にこの復元が妥当とすれば、土埃立ち込める熱気の中で、その一連の「所作」を行った人々が心象に描いた「カマド神」とは、どのような存在だったのだろうか。

2 元總社蒼海遺跡群（118）

鬼瓦 H-1-9 鬼瓦はカマド内から出土した。裏面にはスヌ状の付着物が顕著で、カマドの転用構築材として、内壁側に瓦の裏面を向けて設置されたと判断できる。瓦当面は型押しによる成形だが、瓦泥の掘り込みは浅かったのか、類例に比べて瓦当紋様の隆起は低く、全体的に平滑な印象を受ける。瓦当紋様は、最外周に狭い素紋帯を配し、その内側に2本の界線で区画した連珠紋帯を配する。さらに内側には2本の界線で区画した唐草紋帯を配する。内区には眉と目の表現がかろうじて残り、鬼面の全体的な配置から推測すると、眉はやや釣り上がり気味に表現されている（扉絵中央参照）。裏面には長縄タタキの痕跡が明瞭に残る。

Fig.25には、周辺遺跡で報告された型押し鬼瓦を集め、本資料と比較した。本遺跡から北西約800mにある上野国分僧寺では25片以上の型押し鬼瓦が出土しており、その内13片が報告されている。全体的にやや丸味があり柔らかな印象のA類（1～3）と、やや角味があり繊細な印象のB類（4～11）、大型品で唐草紋帯をもたないC類（12）に分類されるが、「実際にはもう数種類の鬼瓦があったものと思われるが、それらは小破片であるため、文様がまったく分からぬものばかりである」とされる（群馬県教育委員会 1988P208L22～23）。本遺跡から北西約500mにある上野国分尼寺の13は僧寺A類に類似する。14は大型で唐草紋帯をもたないところから、一見すると僧寺C類に類似するが、わずかに残る鬼面には勾玉状の巻込み罫が表現されており、紋様構成自体はむしろ山王庵寺例に近い。なお尼寺では現在のところ、僧寺B類に類似する資料は報告されていない。牛池川を挟んで北約1.2kmにある山王庵寺では7片の鬼瓦が出土しているが、いずれも唐草紋帯をもたず、僧寺の鬼瓦とは共通性が低い。勾玉状の巻込み罫を表現するもの（16～19）としないもの（20・21）の2種の瓦泥が復元されている（前橋市教育委員会 2012）。寺院跡以外の出土例は局部的な細片が多く、同汎関係を把握できないものが多いが、小見三遺跡の資料（24）は僧寺B類に類似し、僧寺・尼寺中間地域染谷川河川敷部の資料（26）は僧寺A類に類似する。上野国府に葺かれた鬼瓦は現在のところ詳細不明である。

本遺跡の資料をみると、界線の表現などには角味があり唐草紋は細密で、全体的には僧寺B類に類似し（27）、国府の様相が不明だが、現状では僧寺からもたらされた可能性が高い。しかし、唐草紋や鬼面の配置は細部で一致せず、特に眉は、僧寺B類が端で下方へ大きく垂れるのに対して、本資料は釣り上がる。瓦泥の掘り込みが浅い点も考慮すると、本資料には僧寺B類からの改祀が推測できる。僧寺A・B類は寺域内で最も出土数が多いことから、創建期の鬼瓦と考えられている（高井 1988P346L20～22）。本資料には改祀の可能性が指摘できることから、創建期ないしはこれをやや下る時期を推定できるが、いずれにせよ、上野国分僧寺瓦編年Ⅱ期（天平13年（741年）頃～8世紀後半）とされた鬼瓦の範疇には収まるだろう。

寺域外での転用の具体が知れる資料は少なく、転用の用途もまちまちである。24は住居跡の床面直上出土だが、転用の用途は分からず。25は井戸跡の覆土中から多量の瓦と共に出土しており、井戸枠の化粧材に転用された可能性がある。なお転用の事例は、現在のところ10世紀以降に確認できる。前者の覆土中からは虎渕山1号窯ないし東山72号窯式期の灰釉陶器碗が出土し、10世紀後半と判断できる。後者の覆土中には大原2号窯式期の灰釉陶器碗・皿や須恵器羽釜・小皿が含まれ、10～11世紀と判断できる。また本資料を出土したH-1号住居跡は11世紀と判断できる。ちなみに高井佳弘氏は『上野国交替実録帳』の検討から、11世紀初頭頃には僧寺の荒廃が進み、南辺築垣や南大門などの寺域外周部は失われていたものの、塔や金堂などの伽藍中枢部は機能していたと考えられている（高井 1988）。

荒廃しつつも命脈を繋いでいた上野国分僧寺の寺院経営において、聖域の守護を象徴した鬼瓦の残片や、転用用途に優れた多量の廃棄瓦は、果たして単純な「瓦蹠」だったのであろうか。



Fig.25 上野国分寺・山王庵寺・周辺遺跡出土の型押し鬼瓦と本報告資料の瓦当紋様比較 (S=1/8)
 1-3. 国分寺寺〔A類〕 4-11. 国分寺寺〔B類〕 12. 国分寺寺〔C類〕 13-14. 国分寺寺S1トレンチ企念跡 15-16-18-20. 山王庵寺等V遺跡1トレンチ
 17-21. 山王庵寺等V遺跡2トレンチ 22. 蒼海(20) 23. トレンチD-10 23. 蒼海(13) 11K遺跡外 24. 小見川遺跡21K-H-25 25. 上野国分寺・尼寺中間地域(谷川河川敷部) 26. 上野国分寺・尼寺中間地域(谷川河川敷部)付近 27. 蒼海(118)-1

古代の墓 DB-1号土坑墓の被葬者は、20歳代の女性と鑑定された。今日の感覚では夭逝を惜しむ年齢だが、もっとも、大宝2年(702年)御野国加茂郡半布里戸籍の分析によれば、当時の出生時平均余命は男性で32.50歳、女性で27.75歳というから(W.W.Farris 1985)、多産多死型の社会とされる(今津2015)。当时においては、平均的な人生を全うしたのかもしれない。

Fig.26には、推定国府域における古墳へ平安時代の墓坑を集めた。事例は平安時代の土坑墓に偏り、火葬墓は現在のところ確認できない。人骨の鑑定が試みられたいくつかの事例のうち、ある程度年齢が特定された人々はいずれも20~30歳代であり、先述の半布里戸籍の分析を裏付けるようである。多くの事例では残りの良い塊や壊が出土しており、墓に食器を供えることは、当時一般的な習俗だったようだ。一方で、本例のように口元へ使い込んだ砥石をいくつも供える例は他になく、故人の人生に深く関わる物なのだろう。本例のように、長い墓坑の中へ、頭を北に向けて仰向けに伸展葬する例は多いが、側臥(横臥)屈葬する例もみえる。墓坑の平面形態は、長軸が長く幅狭のものと、長軸が短く幅広のものに大別でき、おそらくこうした埋葬状態の差違を示すのだろう。釘や木片が出土した例は確認できず、本例も含めて納棺しなかったか、釘付けの木棺を用いなかつたと推測できる。北方位の意識はあるが、いずれの墓にも厳密な規範を読み取ることはできない。また、分布には偏在性がみられる。国府を中心とした生活圏を想定した時、1~4はその圏域の境界領域となりうる場所だが、一方で本例を含めた6~12の遺地は不可解で、現在のところ論ずる手立てがない。偏在はするが集中はしておらず、1~4の一帯では同時期の住居跡が密集し、本例の北側には同時期の住居跡が隣接しており、蒼海(5~17街区)

など、中世以降この地域に営まれる、集中的で大規模な墓域とは景観が大きく異なる。

女性の人生を知る手がかりは、口元に手向けられた4つの砥石だけである。硬軟2種類の砥石が納められ、いずれも丁寧に使い込まれている。磨り減ってもなお愛用したのか、そのひとつには、提砥として転用を試みたと推測できる敲打痕が観察できた。このような使い込まれた小さい転用砥石の出土例は意外と限られるが、周辺では、鳥羽遺跡I～K区に400点を超える多数の出土が確認できる。そのI・K区には、8世紀に大規模な鍛冶工房が稼動しており、国府に関連する官営工房と考えられている。彼女は10世紀を生きた人であり、この工房と直接の関係はないが、本遺跡のT-1号竪穴状構造には10世紀後半～11世紀前半の工房跡の可能性があり、薬研状の強い研ぎ込みが残る大型の砥石らしき石製品も狭い調査区ながら2点出土していることとも考えると、金属工との関わりを指摘することはできる。しかし、金属工という女性像には違和感が残る。浅香年木氏は、8世紀の主要文献史料から、鍛冶・鋳工・鉄工などの金属工を抽出したが（浅香1971P 68第6表）、これらはみな男性である。手工業生産における女性の活躍は、淨清所解に現れる「借馬秋庭女」や、皇太神宮儀式帳に現れる「麻績部春子女」のように土師器生産の場面で認められる。また女性は、律令税制では調納される織機製品の製糸から織成において欠かせない労働力であった。しかし一方で、浅香氏が論ずるように、官営工房へ勤仕した人々が、その体制の馴染とともに束縛を離れて工匠家族化してゆく過程においては（浅香1971P 275L 1～P 306L 2）、このような女性像も許容されるものかもしれない。

いずれにせよ、供えられた砥石は、この女性の帰属関係を端的に示しているのであろうが、それがFig.26-2の鉄製錠のような農業に関わる労働用具でなかったことは、「農民的」であると想定できる本質との矛盾の中で、現実の国府域を生きた人々の人生を垣間見るようにして、意味深いのである。

1. 浅海 (39) D-35 2. 回左 D-42 3. 小尾内貝遺跡9区D-1 4. 回左 DB-2 5. 浅海 (26) 10B1DB-1
6. 浅海 (121) DB-1 7. 浅海 (118) DB-1 8. 浅海 (33) 5区D-58 9. 浅海 (101) D-21
10. 浅海 (2) 7トレスDB-2 11. 回左 DB-3 12. 回左 DB-1 13. 上野国分寺・尼寺中地区C区第17号土塗

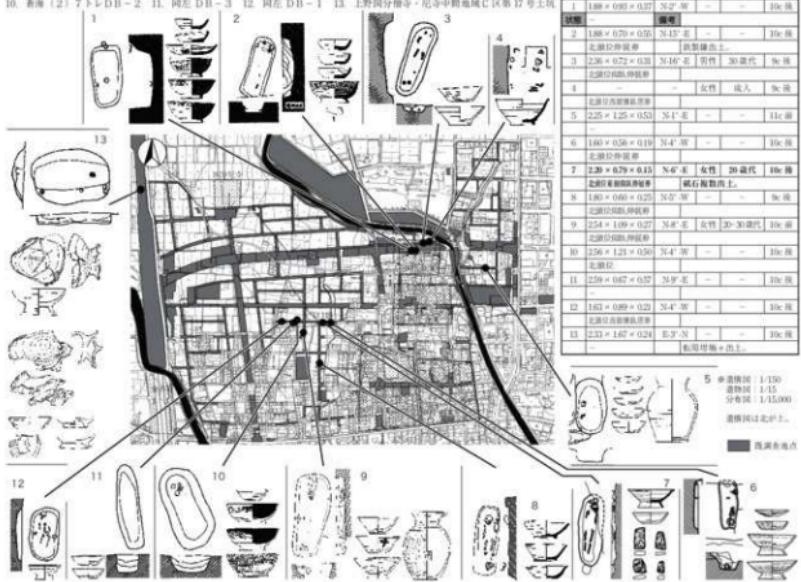


Fig.26 推定上野国府城の平安時代土坑墓



蒼海（117）調査区全景（南から）



蒼海（117）H-1 全景（西から）



蒼海（117）H-1 カマド・貯藏穴全景（西から）



蒼海（117）H-1 カマド燃焼室遺物出土状況（西から）



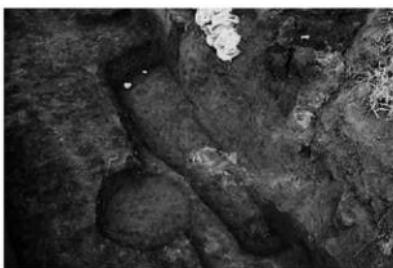
蒼海（117）H-1 貯藏穴遺物出土状況（西から）



蒼海（117）H-1 カマドSPB土層断面（西から）



蒼海 (117) H - 2 全景 (東から)



蒼海 (117) H - 3 全景 (南西から)



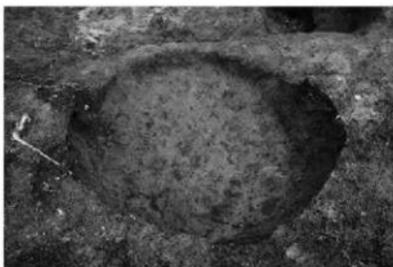
蒼海 (117) W - 1、D - 2 全景 (東から)



蒼海 (117) W - 2・3、1号谷全景 (南西から)



蒼海 (117) W - 2・3、1号谷SPA 土層断面 (東から)



蒼海 (117) D - 1 全景 (西から)



蒼海 (117) D - 3 全景 (南東から)



蒼海 (117) D - 4 全景 (東から)



蒼海（118）調査区全景（北東から）



蒼海（118）H-1 全景（北から）



蒼海（118）H-1-9 鬼瓦出土状況（北西から）



蒼海（118）H-2 全景（南西から）



蒼海（118）H-2 カマド遺物出土状況（南西から）



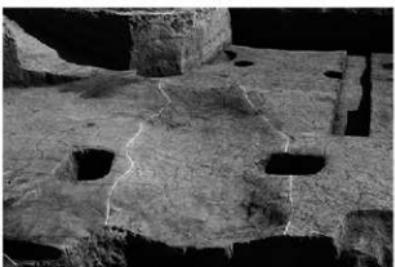
蒼海 (118) H - 3 全景 (南西から)



蒼海 (118) T - 1 全景 (北から)



蒼海 (118) T - 2 全景 (北東から)



蒼海 (118) W - 1 全景 (北から)



蒼海 (118) W - 2 全景 (北西から)



蒼海 (118) 1号探掘坑全景 (西から)



蒼海 (118) I - 1 全景 (北から)



蒼海 (118) I - 2 全景 (東から)



蒼海 (118) I - 3 全景 (東から)



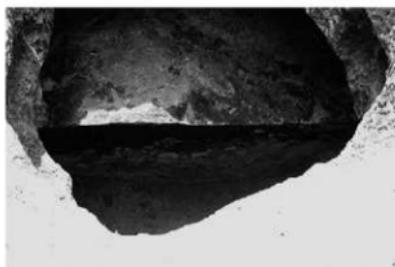
蒼海 (118) DB - 1 人骨出土状況 (南から)



蒼海 (118) X - 1 SPA 1~20層土層断面 (東から)



蒼海 (118) X - 1 全景 (南から)

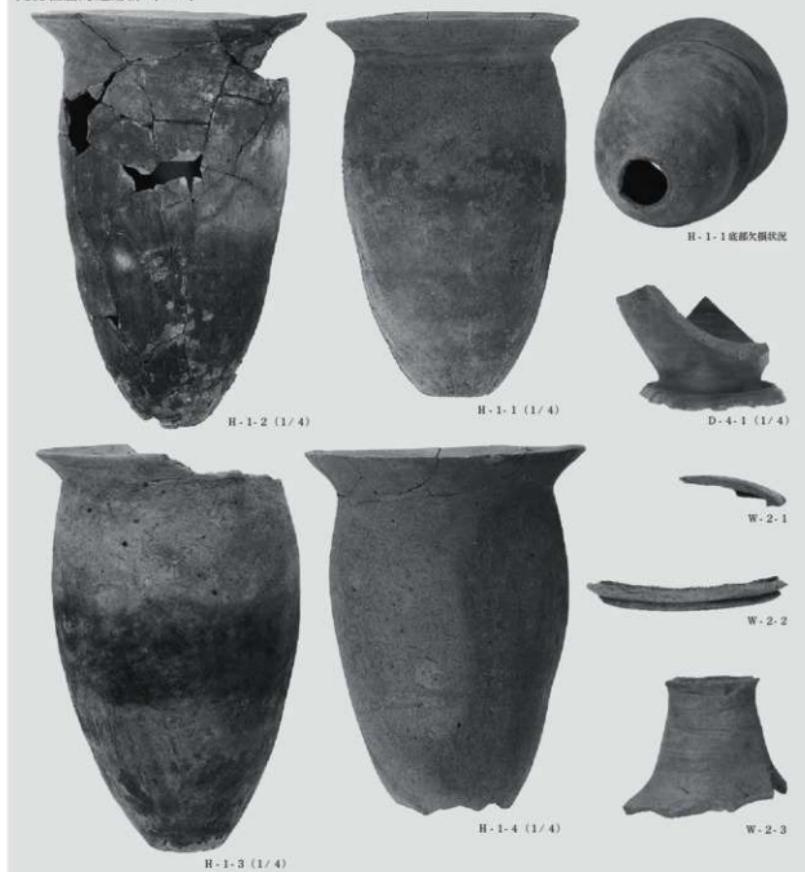


蒼海 (118) X - 1 SPA 20~33層土層断面 (東から)



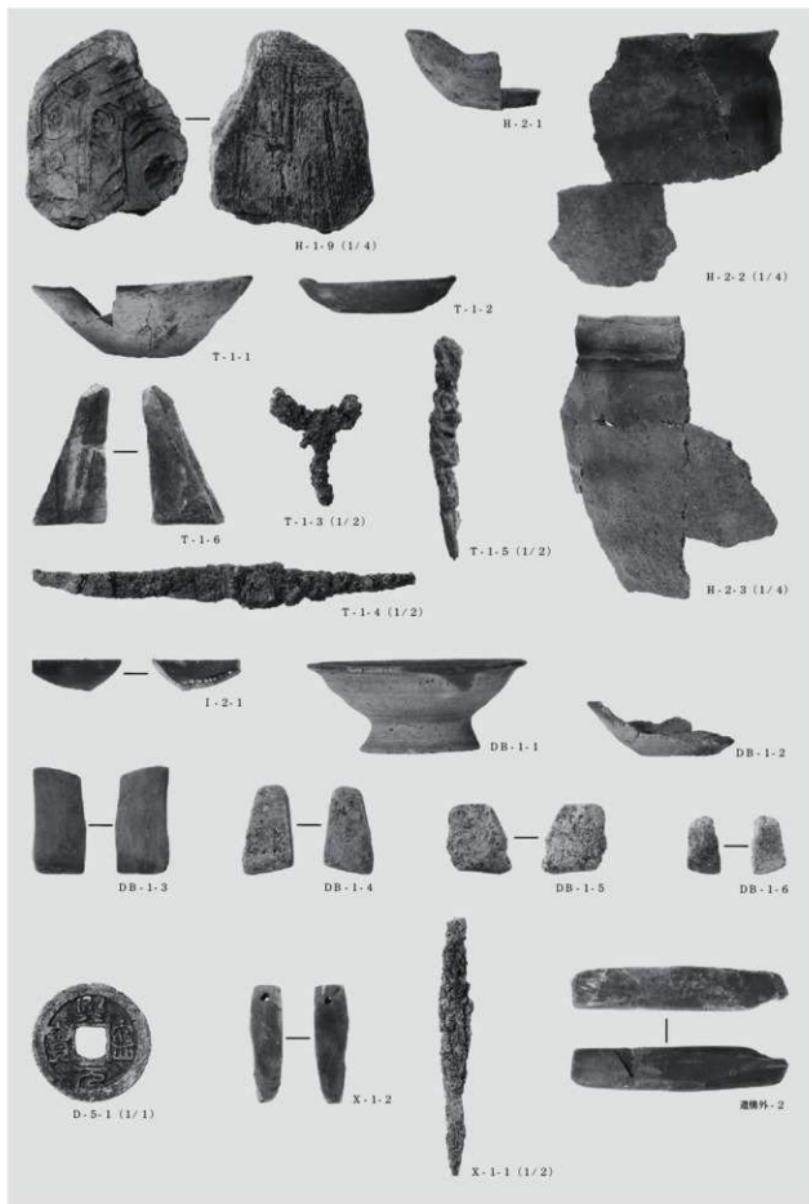
調査風景 (南東から)

元總社舊海遺跡群 (117)



元總社舊海遺跡群 (118)





報告書抄録

カタカナ	モトソウジャオウミイセキダン (117) モトソウジャオウミイセキダン (118)
書名	元総社蒼海遺跡群 (117) 元総社蒼海遺跡群 (118)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	小峰 篤・中村岳彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
発行年月日	2016年11月30日

フリガナ	フリガナ	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東經	
元総社蒼海遺跡群 (117)	前橋市元総社町 1777、1775-2、 1776-1、1776-2、 1776-3	102021	ZTA220	36° 23' 17"	139° 2' 3"	2016.10.7 ~ 147m ²
元総社蒼海遺跡群 (118)	前橋市元総社町 1789-3、1789-4	102021	ZTA221	36° 23' 17"	139° 2' 5"	2016.10.22 ~ 186m ²

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
元総社蒼海遺跡群 (117)	集落	飛鳥時代 奈良時代 中～近世	住居跡 堅穴状遺構 溝跡 踏道跡 土坑 ビット 埋没谷	3軒 2基 3条 1箇所 4基 5基 1箇所	須恵器 (蓋・坏・高盤・長頸 壺) 土師器(長胴壺)	7世紀後半～8世紀前半の 住居跡を破壊し、10世紀の 埋没谷に覆われる大溝。
元総社蒼海遺跡群 (118)	集落	奈良時代 平安時代 中～近世	住居跡 堅穴状遺構 溝跡 探掘坑 井戸 土坑墓 12基 ビット 性格不明遺構	3軒 2基 2条 1基 3基 1基 12基 8基 1基	灰釉陶器(碗) 須恵器(塊・小皿) 土師器(壺・羽釜・ 土釜) 黒色土器(小塊) (鬼瓦) 鉄製品(刀子・釘) 古銭(熙寧元宝) 石製品(砾石)	カマド構築材に転用された、 上野国分寺鬼瓦。 10世紀の土坑墓に埋葬された成人女性は、口元に複数の砾石が副葬されていた。

元総社蒼海遺跡群 (117)

元総社蒼海遺跡群 (118)

前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年11月25日 印刷

2016年11月30日 発行

発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4

TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社